

ウィーンのおペッレター 1. ヨハン・シュトラウスの “こうもり” (Die Fledermaus) について

客員研究員 増田 芳雄

目次

はじめに

1. “こうもり” 作曲の背景
2. ウィーン・オペレッタの先駆者たち
 - A. オッフエンバック
 - B. ズッペ
3. ヨハン・シュトラウスとその時代
 - A. 19世紀オーストリア
 - B. 先祖と父ヨハン
 - C. “ワルツ王” ヨハン・シュトラウス
 - D. ヨハンのオペレッタ
 - E. 弟ヨーゼフとエドゥアルト
 - F. 金の時代のオペレッタ作曲者たち
 - F-1. ミレッカー
 - F-2. ツェラー
 - F-3. ホイベルガー
 - F-4. シュトラウス、オスカー
4. “こうもり” のあらすじ
5. “こうもり” の演奏
 - A. ウィーンの劇場
 - A-1. 初期の劇場
 - A-2. フォルクスオーパー
 - B. 指揮者
 - B-1. クラウス
 - B-2. カラヤン
 - B-3. ベーム
 - B-4. ボスコフスキー
 - C. フォルクスオーパーの歌手たち
 - C-1. 女性歌手たち
 - C-2. 男性歌手たち
6. “こうもり” の音楽
 - A. 序曲
 - B. その他の音楽

むすび

引用文献

原名索引

はじめに

最近、わが国でもウィーンその他ヨーロッパの劇場からのオペラに限らず、オペレッタの公演がしばしば行われるようになり、日本の聴衆にもオペレッタはなじみができつつある。また、ウィーンの国民劇場（フォルクスオーパー）や国立劇場（シュターツオーパー）に行っても、数多くの日本人観客を見かけるようになってきた。筆者が1960年代はじめ、これらの劇場にオペレッタを聴きに行きはじめた頃、日本人の顔を見ることは稀であった。

オペレッタ作曲家としてわが国で知られているのはヨハン・シュトラウスやフランツ・レハールらで、レハールのメリーウイドウは日本では大人気である。しかし、ウィーンで人気のトップはシュトラウスの“こうもり”、あるいはミレッカーの“乞食学生”（1882）、カールマンの“チャルダッシュの女王”（1915）などである。なかでも“こうもり”は国民劇場で1972-87年のオペレッタ公演全数の約10パーセントという抜群の公演数に達している（渡辺忠雄、1989；Masuda and Hübl, 1997）。数多くのワルツとポルカの名作を残した“ワルツ王”ヨハン・シュトラウスは16曲ものオペレッタを作曲したが、台本に恵まれた“こうもり”と“ジプシー男爵”の2作のみしか成功しなかった。このうち“こうもり”はオペレッタとしては破格の扱いと名声をほしいままにする傑作といえる。

筆者が若い頃、クラウスの“こうもり”全曲レコードに魅せられ、本物を観たいと願っていたのが、初めて“こうもり”をウィーンで観劇したのは1962年、当時はまだオペレッタ公演をしていたライムント劇場においてであった。その時の華やかな舞台、生の音楽という本物の素晴しさは忘れ難い。筆者はますます“こうもり”のとりこになった。以後、国民劇場やときには国立劇場で“こうもり”を10回近く観る機会に恵まれた。筆者の場合、学会出張などの機会にウィーンを数日訪問する程度なので、どのような出し物に当たるかは運次第であるが、他のオペラ、オペレッタに比べると、“こうもり”に当たる確率はかなり大きかったように思える。それほど、ウィーンでは“こうもり”の公演が多いということになる。どの“こうもり”を観ても音楽、配役にそれぞれ特徴があり、いつ観ても楽しめ、そして飽きないのが“こうもり”である。今まで来日した国民劇場オペレッタも、日本人に大人気の“メリーウイドウ”のほか、大抵は“こうもり”を上演するので、このオペレッタも日本で高い人気を持ち始めているようである。筆者はウィーンや来日したフォルクスオーパーの公演を聴くことはもちろん、多種類の“こうもり”全曲レコード、テープ、あるいはCD、LDを所有し、暇さえあればその音楽に耳を傾けるのを最大の趣味としてきた。本稿では、このウィーン・オペレッタの代表といえる“こうもり”がどのようにして創作されたか、どのような魅力を持つのかなど、時代背景とともに、私見を交えながら以下に考察したい。

1. “こうもり”作曲の背景

ウィーンのエペレッタについては成書も多い（たとえば大田黒元雄、1952；Teetgen, 1952；Schneidereit, 1981；寺崎裕則、1983、1985；白石隆生、1989；渡辺忠雄、1990）。以下にこれらを参考にして概略を述べたい。

ウィーンのエペレッタはパリから移入されたと言われる。19世紀ウィーンでワルツ、ポルカ

の作曲家として高名なヨハン・シュトラウスがオペレッタに手を染めるようになったのは、1864年、ウィーンを訪れた オッフエンバックに会い、オペレッタ作曲を勧められたため、と言われる。また、シュトラウス夫人もオペレッタを書くように夫を激励したという。もっとも、オフエンバックはシュトラウスに、ほんの外交儀礼か冗談半分で作曲をすすめたのに、シュトラウスが本気で作曲し始めたので、オフエンバックはかえって驚いた、という話もある (Teetgen, 村田武雄訳、1952)。しかし、ウィーンにおけるオペレッタの始まりは実はシュトラウスでなく、ズッペであった。彼の“寄宿学校”は1860年カール劇場で上演され、これがウィーンにおけるオペレッタの曙となった。

オフエンバックや妻の勧めでようやくオペレッタ作曲に手を染めたシュトラウスは、まず1871年に処女作“インディゴと40人の盗賊”を発表、ついで1873年に“ローマの謝肉祭”を作曲したが、いずれも成功とはいえなかった。今日では両者の序曲や一部の曲が演奏されるに止まっている。しかし、興味あることに、最高傑作“こうもり”が作られるにあたっては、オフエンバックと妻の勧め以外に別の要因があった。それは1873年5月9日の“Black Friday” (黒い金曜日) であった。ウィーンの株式は暴落し、経済不況が襲ってきた。これに先立ち、革命後、プロシャとの戦争に敗れたオーストリアはドイツ統一の覇者となれず、オーストリア・ハンガリー二重帝国となり、ハプスブルク家の栄光にも陰が差し始め、そこへ経済恐慌がおこり、人心は荒廃した。当然のことながら、劇場へ足を運ぶ人も激減し、劇場経営も危機に陥った。そこで劇場関係者は何とかして観客の足を取り戻したいと、あれこれ秘策を練った。

たまたま、フランスのパリではヴォードヴィル (vaudeville, 寄席、音楽劇) が盛んで、とくに1872年上演されたメイヤックとアレヴィーの“復讐” (Le Reveillon) が大成功であることがウィーンに伝えられた。この音楽劇はもともとドイツの劇作家で台本家のベネディックスの人気喜劇“牢獄” (Das Gefängnis) に基づいたものであった。そこでアンデアウィーン劇場の劇場支配人シュタイナーはこの作品の権利を買い取り、ハフナーに台本のドイツ語訳を委任した。ハフナーはケーニヒスベルク (東プロシャ) 生まれの貧乏作家で、当時45グルデンの月給で、カール劇場のため1年間に12本の喜劇を書くのが務めであった。

ハフナーは、“復讐”のパリ風の性格をウィーンの聴衆の趣味に合わせ、その理解を得るように、改変するのに大変な苦勞をした。しかし、この努力は成功しなかった。そこで一つの解決策がウィーンの出版者レヴィによって提案された。彼は、ハフナーの劇を古い友人シュトラウスのためにオペレッタ台本にするよう、シュタイナーを説得した。その結果、この仕事はアンデアウィーン劇場の楽長で、作曲家、台本作家ジュネに任された。このときのことを“Die Wiener Vorstadt-Bühnen”紙のホルツァーは、ハフナーの原稿を受け取ったジュネの反応を以下のように書いている (1951): “一読してこの原稿が役にたためことがわかった。そこで、翌朝フランスの原稿を貰い、これをもとに「こうもり」の台本を書いた。私は返却したハフナーの喜劇から登場人物の名だけを残し、原典の構成や登場人物の役柄も大幅に改変した。しかし、劇場側は改変に定められた一定額、すなわち一幕当たり100グルデン (現在の210ポンド) しか払わなかった。ハフナーを傷つけないよう、私は彼の名を共著者として台本に残すことに同意した。もっとも、私は彼に会ったこともなかった。こうして台本は作曲家に手渡された。”

シュトラウスは台本を一読してこの“こうもり”に魅せられ、すぐにこの仕事を引受け、台本作家と協力しながら作曲にかかった。市の西郊外のヒーツィングの別宅でシュトラウスは42昼夜という驚くべき早さで楽譜の大部分を書き上げた。ジュネの役目は、歌詞や台詞に限らず、総譜の分析まで行うことであった。ラチェクによると(1974)、“ヨハン・シュトラウスはフィナーレのスケッチをジュネに送った。ジュネはスコアを拡げ、必要に応じて新しい台詞を加え、またところどころ改変を求め、これを楽器指定のため、およびチェックのためシュトラウスに送り返した。こうして総譜の一部が完成すると、ジュネはそれを直ちに写譜業者に送った。

“こうもり”ははじめ1874年9月に初演される予定であったがアンデアウィーン劇場の経済的困難のため、予定が1月あるいは春に早められた。しかし、オーストリアの法律により慈善演奏の初演はイースターの日曜日、4月5日に決められた(図1)。こうして、“こうもり”は同日アンデアウィーン劇場において初演された。しかし、はじめこそ大反響を得たが、結果は失敗であった。このオペレッタはウィーンの庶民の生活を描いたものでなく、上流社会を題材にしており、また音楽も民族的なものでなく、コスモポリタンの性格を示していたため、市民たちには十分理解できなかった。このため、公演16回で劇場はこのオペレッタを取り下げた(Ludwig Eisenberg, 1894)。チーラーのドイツ音楽新聞(Deutsche Musik Zeitung, 1874年4月6日)は台本、配役、音楽について次のように批評した：“台本はとくに良いとは言えない。音楽は魅力的である。オペレッタは長すぎ、登場人物が多すぎる。このオペレッタは大人気を博するほどではない。”また、郊外新聞(Konstitutionelle Vorstadt-Zeitung, 1874年4月7日)は反対に次のように絶賛した：“鳴り響く序曲は拍手喝采で迎かえられ、このオペレッタを全身汗びっしょりで指揮したヨハン・シュトラウスは興奮する聴衆に感謝のため指揮台から離れ難いほどであった。そして数限りないアンコール(da capos)に答えた。また、別の新聞(ウィーン号外新聞)もこのオペレッタの成功を報じた。こうして、ウィーンにおける“こうもり”初演は竜頭蛇尾だったと言ってよいであろう。

このように、一部の新聞は成功を報じたが、わずか16回の公演でアンデアウィーン劇場はこのオペレッタの興行を取り止めるほど、ウィーンでの初演は結果として不成功であった。しかし、その後ベルリン、次いでパリで大成功を博し、ウィーンでも再演となり、漸く成功を納めた。現在ではこの“こうもり”は最もウィーン的といわれるほどの人気を誇るに至った。“こうもり”の音楽があまりにも素晴しかったので、もともと音楽的才能のすぐれていた弟ヨーゼフの曲を兄ヨハンが盗作した、という噂が流れたくらいであったが、それは事実と反する(渡辺護、上、1989)。このオペレッタが現在、他と違う特別な地位を保つに至った理由の一つには次のような事実もあった。すなわち、1926年、ザルツブルクフェスティバルにおいて、ブルーノ・ワルターがウィーンフィルハーモニーを指揮して“こうもり”を演奏した。“こうもり”はこのモーツァルトゆかりのフェスティバルでかつて上演された唯一のオペレッタで、“こうもり”はモーツァルトの“女はみなこうしたもの”のオペラのふさわしい隣人と見なされたためといわれる(Dieman, 芹沢ゆりあ訳、1986)。

K. k. priv. Theater an der Wien.

Unter der Direktion



Geißinger & Steiner.

Sonntag den 5. April 1874.

Die Fledermaus.

Römische Operette in 3 Akten nach Meißner und Halevy's „Reveillon“, bearbeitet von C. Haffner und Richard Genée. Musik von Johann Strauß.

Länge arrangirt von der Balletmeisterin Frau Therese v. Kilany.
Die neuen Dekorationen des ersten und zweiten Aktes von Herrn Alfred Moser. — Die neuen Kostüme angefertigt vom Obergarderobier Herrn Schulze.
Möbel von Aug. Rißfeld's Erben (Rudolf Rißfeld), l. l. Hoflieferant.

| | | | | |
|----------------------------------|-----------|-------|-------|--------------------------|
| Gabriel von Eisenstein, Rentier | | | | Hr. Sjila. |
| Rosalinde, seine Frau | | | | Marie Grisinger. |
| Franz, Gefängniß-Direktor | | | | Hr. Brisch. |
| Franz Drloski | | | | Hr. Nittinger. |
| Alfred, sein Gesangslehrer | | | | Hr. Rädinger. |
| Dr. Falck, Notar | | | | Hr. Ledrecht. |
| Dr. Blind, Advokat | | | | Hr. Kott. |
| Adèle, Stubenmädchen Rosalindens | | | | Hr. Charles Hirsch a. G. |
| Mi-Ten, ein Ägypter | | | | Hr. Romani. |
| Mamulin, Gesandtschafts-Attaché | | | | Hr. Jäger. |
| Murray, Amerikaner | | | | Hr. Siebold. |
| Carillon, ein Marquis | | | | Hr. Thalboth. |
| Lord Riddleton | | | | Hr. Hint. |
| Baron Oskar | | | | Hr. Mellin. |
| Frosch, Gerichtsdienner | | | | Hr. Schreiber. |
| Noan, Kammerdiener des Prinzen | | | | Hr. Gärtner. |
| Joan, | | | | Hr. Julek. |
| Melanie, | | | | Hr. Kopl. |
| Felicita, | | | | Hr. Schindler. |
| Eidi, | | | | Hr. Treuge. |
| Minni, | Gäste des | | | Hr. R. Grünfeld. |
| Kaufmann, | Prinzen | | | Hr. N. Grünfeld. |
| Silvia, | Drloski | | | Hr. Künzler. |
| Sabine, | | | | Hr. Studel. |
| Bertha, | | | | Hr. Steinburg. |
| Lois, | | | | Hr. Donner. |
| Paula, | | | | Hr. Romani. |
| Erster) Diener des Prinzen | | | | Hr. Buchner. |
| Zweiter) | | | | Hr. Kofsch. |
| Ein Amtsdienner | | | | Hr. Schwallat. |

Herrn und Damen, Maßen, Bediente.

Die Handlung spielt in einem Badeort, in der Nähe einer großen Stadt.

Vorkommende Tänze:

1. Spanisch, ausgeführt von Hr. Grillich und 8 Damen vom Ballet.
2. Schottisch, Hr. Gerabini, Fichtner, Wolfshad, Meter und West.
3. Russisch, Hr. Angelina Vomek, Hr. Stubenwall, Nagelschmidt, Ortelofsky, Guhr, Schmidt und Gräbel.
4. Polka, Hr. Walter, Hr. Raab und Anna Thora.
5. Ungarisch, ausgeführt von Hr. Wenda und Herrn Couqui.

Anfang 7 Uhr.

A. I. Hoftheater-Druckerei.

(S. 7. 61. 3.)

図1. “こうもり” 初演のプログラム (Editon Eulenburg GmbH, Zürichから)。

2. ウィーン・オペレッタの先駆者たち

もともとオペレッタとは小さいオペラを意味するが、日本語では「喜歌劇」と訳されている。大田黒元雄（1952）あるいはBruyr（窪川／大江訳、1981）によると、音楽劇のオペレッタに至る時期は3つに分けられるという。すなわち、1. 1854-5年にパリで出たオペラ・ブッフアに始まる；2. 庶民的なオペラ・コミックの影響が現われた；3. 本格的なオペレッタの誕生。事実、オペレッタの祖といわれるオッフエンバック（1819-1880）の最初の作品“パスカルとシャンボール”（1839）は1幕もので、ヴォードヴィルと呼ばれていた。また、次の“閨房”（1847）はオペラコミックと呼ばれていた。最初にオペレッタと呼ばれた1幕の作品は“真夏の夜の夢”（1855）である。そして、彼の本格的な3幕のオペレッタ“ラインの妖精”は、面白いことに、パリでなくウィーンで1864年に上演された。これに対して、17-19世紀にドイツやオーストリアに民俗的な音楽劇があり、これはジングシュピールと呼ばれおり、ドイツではオペラに対し

てジングシュピールという語が用いられていた。“魔笛”などドイツ語オペラはジングシュピールの伝統を踏んでいる（渡辺護、1990）。ウィーンのおペレッタもドイツ語を用いた音楽喜劇であるが、これは上述のようにパリのオペレッタを移入したもので、ジングシュピールの概念には入らず、オペラ・ブッフア、オペラ・コミックなどと並ぶ概念といわれる。

シュトラウスにオペレッタ作曲を勧めたのは、すでにパリで上のように活動し、高い名声を得ていたオッフェンバックであった。また、ウィーンでオペレッタを初めて公演したのはズッペ（1819–1895）で、すでに1860年のことであったことは述べた。この2人は偶然同年齢であるが、シュトラウスが従来の“ワルツ王”としてのみでなく、オペレッタ作曲家としてウィーンに登場するまでの下地を作ったといえよう。しかも興味あることに、2人ともウィーン人でない。以下、この2人について概観しよう（以下、筆者が観たものには*をつける）。

A. オッフェンバック（図2）

オッフェンバックは1819年6月20日、ドイツ、ケルンのユダヤ教会合唱指揮者の次男として生まれた。幼い頃から父の手ほどきでヴァイオリン、そして10歳頃からチェロを習った。早くから神童といわれるほど音楽に才能を示したという。さらに音楽の勉強をするためパリへ送られた。このころから姓を父の出身地、マイン河畔のオッフエンバッハとしたと伝えられる（Decaux, 梁木靖弘訳、1985）。

パリでは、原則として外国人の入学を許さないパリ音楽院に特に入学を許されたが、それは院長のケルビーニ（イタリー人、1760–1842）の特別の計らいであったという。はじめチェリストとして音楽生活を始めたが、1839年以降音楽喜劇を作り始めた。初期の作品はいずれも失



図2. オッフェンバック。Acanta. Ein Produkt der Fono Trsm GmbH, Hamburg から。

敗であったが、パリ万国博覧会の開催された1855年、彼はシャンゼリゼの劇場で自作を上演し、本格的にオペレッタ作曲にとりかかった。この年、10もの新作を発表し、いずれも大当たりであった。ついで彼はオペラ座近くの劇場で新作を次々に発表し、大ヒットを重ねた。そして、1858年10月21日初演の、2幕の“天国と地獄（地獄のオルフェ）”＊は258日というロングランの記録を作るに至った。オッフェンバックの有名な作品として現在知られているものには以下のようなものがある：トロイ戦争の原因となった王妃ヘレナを題材にしたオペレッタ“美しきヘレナ”（1864）、“青髭”（1867）、日本で浅草オペラに取り上げられたオペレッタ“ジェロルシュタイン大公妃”（1867）、“ヴェール・ヴェール”（1869）、そして本格的オペラ“ホフマン物語”がある。このオペラは彼の最後の作品で、亡くなる1880年10月5日には完成間近であったが、1881年2月10日にパリのオペラ座で初演された。

B. スッペ

1919年4月18日、当時オーストリア領だったアドリア海に面したダルマチアのスピリット（現ユーゴスラビア領）で生まれた。父はベルギー系の官吏で、母はウィーン生まれのイタリア人であった。母の親戚には作曲家ドニゼッティがいたという。スッペには楽才があり、10歳の頃からフルートを吹き、13歳で作曲をしたそうである。法律を学ぶためパドヴァに行ったが、音楽に熱中した。父の没後、母と一緒に母の父親の住むウィーンに1835年移住し、ここの音楽院で作曲家のザイフリート（1776－1841）に師事して勉強した。1840年9月から新設のヨーゼフシュタット劇場の指揮者となり、作曲もした。また、この劇場がレオポルトシュタット劇場からカール劇場と名を変え、オッフェンバックのオペレッタが上演され、本人もこの劇場を訪問した。スッペはオッフェンバックに影響され、1860年“寄宿学校”を作曲、ここで上演された。その後、オッフェンバックの“美しきエレナ”に対抗して“美しきガラテア”＊（1865）、“軽騎兵”（1866）、あるいはシュトラウスが作曲を断わった“ファティニツァ”を作曲した。このオペレッタは1876年にカール劇場で上演され、大成功を収めた。さらに1879年“ボッカチオ”＊を作曲、上演し、成功を収めた。以後の作品は人気を得るに至らず、スッペは病気のち、1895年5月21日世を去った。スッペはしたがってシュトラウスと同じ時期にウィーンのカール劇場とアンデアウィーン劇場でしのぎを削っていたわけである。彼等そして他の作曲家によるオペレッタが上演された19世紀ウィーンの劇場や上演題目については論説がある（渡辺忠雄、1992）。

3. ヨハン・シュトラウスとその時代

A. 19世紀オーストリア

ヨハン・シュトラウスの時代はナポレオンにより神聖ローマ帝国が消滅させられ、その皇帝位を長く占めてきたハプスブルク帝国が衰退の兆しをみせていた。ウィーン会議において宰相メッテルニヒが辛うじてオーストリア帝国のヨーロッパにおける政治的主導権を保とうとしたが、1848年の革命で彼の失脚とともに帝国も落日への道を進むことになった。そして、1866年、ドイツ統一の主導権を争ったプロシャとの戦いに敢えなく敗れ、帝国はハンガリーとの二重帝国となり、ドイツの覇者への道は閉ざされた。しかし、1948年、革命のとき、父皇帝の退

位のあとを継いだ皇帝フランツ・ヨーゼフの人気とウィーンの大改造などにより斜陽ながらオーストリアの、とくに文化的残像はその後も続いた。ウィーン、とくに世紀末についてのべた本は多い（たとえば池内紀、1981）。

表1. ヨハン・シュトラウス関係の年表

| | |
|----------|--|
| 1825年 | 7月11日：父シュトラウス はアンナ・シュトライム (Anna Streim) と結婚。 |
| | 9月 1日：父はラナーと別れ、自身の楽団 (Kapelle)を持つ。 |
| | 10月25日：息子のヨハンがVorstadt St. Ulrich, Rofranogasse76 (現在はLerchenfelder Strasse 15,VII) で出生。 |
| 1827年 | 3月26日：ベートーヴェンがウィーンで死去。 |
| | 8月20日：弟ヨゼフが生まれる。 |
| 1828年 | 11月19日：シューベルト がウィーンで死去。 |
| 1830年 | 8月18日：のちの皇帝フランツ・ヨーゼフがシェーンブルン宮殿で出生。 |
| 1833年 | レオポルトシュタットのTaborstrasseに家 “Zum goldenen Hirschen” (金色の雄鹿) を購入して移住。 |
| | 5月 7日：ブラームスが ハンブルクで出生。 |
| 1835年 | 3月 2日：皇帝フランツ1世が死去、子息のフェルディナントが皇帝となる。 |
| | 3月15日：弟エドゥアルトが出生。 |
| 1841年 | ：ヨハンは工芸学校で2年間の勉強を始める。和声と対位法をホフマンとドレヒスラーに、ヴァイオリンを父のオーケストラの第一ヴァイオリニストのアモンおよびコールマンに学ぶ。 |
| 1842年 | 4月29日：ミレッカーがウィーン で出生。 |
| | 6月19日：ツェラーが出生。 |
| 1843年 | 4月14日：ラナーがチフスのため死去。 |
| 1844年 | 10月15日：ヒーティングのドムマイヤーカジノでヨハンは自身のオーケストラを率いてデビュー。曲は “の詩” (Op. 1), “求婚者” (Op.4), “デビューカドリーユ” (Op. 2), ポルカ “心からの楽しみ” (Op. 5)。 |
| 1845年 | ヨハンは第2市民連隊、宮廷オーケストラの楽長 (Hofkapellmeister des 2. Bürgerregiments) に任命される。 |
| 1846-47年 | グラーツ, ハンガリーのアルテンベルクおよびベシュトそしてハンガリー、ルーマニアのブカレストとワラキア地方へ演奏旅行。 |
| | 12月10日：レオポルト劇場再開。 |
| 1848年 | 革命 |
| | 5月 : ヨハンはレオポルトシュタット国民軍オーケストラのコンサートマスターになる。ワルツ “自由の歌” (Op. 52), “革命行進曲” (Op. 54)。 |

- 8月 ブリュンへ旅行。——“ブリュン国防軍行進曲”(Op. 58)。父ヨハンのラデツキー行進曲”(Op. 228) 初演。
- 10月31日：皇帝軍、市を撤退。
- 12月 2日：皇帝フェルディナントがオルムツで退位し、フランツ・ヨーゼフが皇帝となる。
- 1849年 9月25日：父死去。
- 10月 7日：父と息子の合併オーケストラの初演が国民公園において子ヨハンの指揮のもとに行われた。
- 1850年-51年 ワルシャワ、ドイツへ演奏旅行。
- 1852年 2月 7日：ヨハン は初めて宮廷舞踏会で指揮。
- 11月 ブラハ、ライプチヒ、ベルリン、ハンブルク、ドレスデンへ演奏旅行、病気になる。“愛の歌”(Op. 114)。
- 1853年 2月18日：皇帝フランツ・ヨーゼフの即位5周年記念式典にヨハン出席、“フランツ・ヨーゼフ1世万歳行進曲”(Op. 126) を献呈。
- 7月23日：兄ヨハンの病気療養中、弟ヨゼフ が初めてシュトラウスオーケストラを指揮。
- 1854年 4月24日：皇帝フランツ・ヨーゼフがバイエルンのエリーザベトと結婚。
- 1856年 ヨハンはロシア(パヴロフスク)へ最初の演奏旅行。以後1865年まで毎年続く。
- 1857年12月20日：皇帝、(市壁 Basteien)の破壊を命令。
- 1858年 パヴロフスクのオルガ・スミミツキと交際、1860年まで続く。
- 1860年 7月 7日：モラヴィアでマーラー出生。
- 11月24日：カール劇場でズッペの“寄宿学校”が初演。ウィーンにおけるオペレッタのはじまり。
- 1861年 “常動曲、音楽の冗談”(Op. 257) 作曲。
- 1862年 4月 6日：弟エドゥアルトがシュトラウスオーケストラを初めて指揮。
- 5月15日：シュニツラーがウフィーンで出生。
- 5月25日：ネストロイがグラーツで死去。
- 8月27日：ヨハンは歌手で10歳年長のイエッティ・トレフスとシュテファン教会で結婚。
- 1863年 宮廷舞踏会音楽監督(K.k. Hofballmusik-Direktor)の称号を授与される。
- 1864年 オッフエンバッハにウィーンで会う。妻にオペレッタの作曲を勧められる。ワルツ“朝の新聞”作曲。
- 1865年 5月 1日：環状道路完成。
- 1866年 プラーター通り54へ引っ越し(現在 ヨハン・シュヨラウス博物館)。
- 1867年 2月15日：Dianabad ホールで“美しき青きドナウ”(Op.314) 初演。ワルツ“芸術家の生涯”(Op.316), ポルカ“うわき心”(Op.319)。
- 万国博覧会のためパリとロンドンへ旅行。
- 1868年 ワルツ“ウィーンの森の物語”(Op. 325), ポルカ“雷鳴と電光”(Op.324)。
- Hetzendorfer Strasse (Maxinggasse 18)へ転居。

- 1869年 ワルツ“酒、女、唄”(Op. 333), ヨーゼフとの協作“ピッチカート・ポルカ”
5月25日:新宮廷歌劇場開館。
- 1870年 ワルツ“楽しめ人生を”(Op.340), “新ウィーン”(Op.342), ポルカ・フラン
ンセーズ“クラッペンの森にて”(Op.336),アンデアウィーン劇場と独占契
約署名。
2月23日:母の死去。
7月22日:弟 ヨーゼフ 死去。
- 1871年 2月10日:オペレッタ“インディゴと40人の盗賊”をアンデアウィーン劇場で初演。
- 1872年 米国へ演奏旅行、ボストンで大コンサート(1万人共演)、ニューヨークでも
コンサート。
ブラームス、ウィーンへ移住。
- 1873年 3月 1日:オペレッタ“ローマの謝肉祭”, アンデアウィーン劇場で初演。
5月 1日:プラーターで万国博覧会開場。
5月 9日:株式急落(黒い金曜日)。ワルツ“ウィーン気質”(Op.354)。
- 1874年 4月 5日:オペレッタ“こうもり”, アンデアウィーン劇場で初演。
イタリーへ演奏旅行。——ワルツ“Bella Italia”または“シトロンの花咲く
ところ”(Op. 364)。
- 1875年 2月27日:オペレッタ“ウィーンのカリオストロ”, アンデアウィーン劇場で初演。
“La Reine Indigo”初演のためパリへ演奏旅行。
- 1876年 ドイツへ演奏旅行。
- 1877年 1月 5日:オペレッタ“メトウザレムの王子”, カール劇場で初演。
パリオペラ座で仮面舞踏会を指揮。
- 1878年 4月 8日:妻イエッティ死去。“こうもり館”を去る。
5月28日:カール 教会でアンゲリカ(リリ)ディットリッヒと結婚。
Igelgasse Nr.4(現Johann-Strauss-Gasse)へ引っ越し。
12月18日:オペレッタ“盲目の牛”, アンデアウィーン劇場で初演。
- 1879年 パリでオペラ舞踏会を指揮。
2月 1日:ズッペの“ボッカチオ”, カール 劇場で初演。
- 1880年10月 1日:オペレッタ“女王のハンカチーフ”, アンデアウィーン劇場で初演。
- 1881年11月25日:オペレッタ“愉快的合戦”, アンデアウィーン劇場で初演。
12月 8日:リング劇場焼失。
- 1882年 アンゲリカと離婚、アデーレ・シュトラウスと知り合う。
12月 6日:ミレッカーの“乞食学生”, アンデアウィーン劇場で初演。
- 1883年 3月 1日:ワルツ“春の声”(Op 410), ビアンカ・ビアンキの歌で初演。
10月 3日:ベルリンの新Friedrich Wilhelmstadtischen Theaterにおけるオペレッタ“ヴェ
ェネチアの一夜”初演についての劇場の醜聞。

- 10月 9日：ウィーンにおける“シュプレー川畔、大司教都市の黒い噂に対する大規模抗議”
(Tausendstimmiger Protest gegen die dunkelhafte Metropole an der Spree)の初演。
“ジプシー男爵”の最初の構想。
- 1884年 芸術家協会40周年記念祝賀会
- 1885年10月24日：オペレッタ“ジプシー男爵”アンデアウィーン劇場で初演。
オーストリア市民権解除の提案。(?)
- 1886年 ザクセン・コーブルク・ゴータ公国の市民となる。
- 1887年 7月11日：リリとコーブルクで離婚。
8月15日：アデーレと結婚。
12月17日：オペレッタ“田舎者”，アンデアウィーン劇場で初演、しかし不成功。
- 1888年10月14日：新宮廷劇場開館。
- 1889年 “皇帝円舞曲” (Op. 437), ベルリンで初演。
1月30日：マイヤーリンクの悲劇 (ルドルフ皇太子の心中)。
- 1890年 かつて市壁の外の地域が市に編入。
5月 1日：ウィーンにおいて最初の“5月祭”(Mai-Feiern)開催。
- 1891年 :ワルツ“大ウィーン”(Op.440), プラターホールで初演
1月11日：ツェラーの“小鳥売り”，アンデアウィーン劇場で初演。
- 1892年 1月 1日：オペラ“騎士パスマン”，宮廷歌劇場で初演、しかし不成功。
ワルツ“もろ人手を取り”(Op. 443)。
- 1893年 1月10日：オペレッタ“伯爵夫人ニネッタ”，皇帝の隣席のもと、アンデアウィーン劇場で初演。その中、“新ピチカートポルカ”(Op. 449)。
- 1894年10月 :芸術家協会50周年記念。
10月12日：オペレッタ“ヤブカ、リンゴ祭”，アンデアウィーン劇場で初演。
10月28日：“こうもり”宮廷歌劇場で初演。
- 1895年 5月21日：ズッペ，ウィーンで死去。
10月29日：ルエガーが初めてウィーン市長に選ばれたが、皇帝はこれを承認せず。
12月 4日：オペレッタ“くるまば草”，アンデアウィーン劇場で初演。
- 1896年10月11日：ブルックナー，ウィーンで死去。
- 1897年 3月13日：オペレッタ“理性の女神”が不都合な状態でアンデアウィーン劇場で初演。
4月 3日：ブラームス，ウィーンで死去。
- 1898年 パレー曲“シンデレラ”の作曲開始。
1月 6日：ホイベルガーの“オペラ舞踏会”，アンデアウィーン劇場で初演。
5月31日：ライムント 記念碑除幕式に際し、“ライムント時代の響”をドイツ国民劇場で指揮。
8月17日：ツェラー，バーデンで死去。
12月14日：皇帝50周年記念市立劇場（後の国民劇場）開場。

- 1899年 5月22日：宮廷劇場で“こうもり”序曲を指揮。
 6月 3日：ヨハン・シュトラウス 死去。
 6月 6日：多数の参列者のもと、中央墓地に埋葬。
 10月26日：オペレッタ“ウィーン気質”，カール劇場で初演。
 12月31日：ミレッカー，バーデンで死去。
- 1900年 アンデアウィーン劇場売却。
- 1901年 2月13日：エドゥアルト，シュトラウスオーケストラを解散。
 5月 2日：バレエ音楽“シンデレラ”，ベルリンで初演。

もともとオーストリアという国は多民族国家で、ことに1867年、オーストリア・ハンガリー2重帝国が成立したあと、国家を構成する民族たちは互いに反目し、中部ヨーロッパの不安定さの原因となっていた。皇太子ルードルフがウィーン郊外のマイヤーリングで心中し、その母で王妃であるエリーザベトが暗殺され、そして20世紀に入るや、皇太子とした甥のフェルディナントが皇太子妃とともに1914年、サラエヴォで暗殺され、第一次世界大戦が勃発するに至る。この困難な時代、人々の反感を調和させたただ一つの声は“シュトラウスの不思議なヴァイオリン”であった。彼が音楽でした申し立ては、貴族や政治家が東になってしたあらゆる申し立てよりも、不和を解き、憎悪をなだめ、内部の民族的闘争を静めるに役立った（Teetgen、村田武雄、1952）。人々はダンスなど日常的快樂を追い求め、ここに大衆音楽の発展する下地ができたが、ラナーやシュトラウス一家の音楽はこの時代のウィーンにおける大衆文化を象徴するように思える。この時代は、表1の年表に示すように、シュトラウスの音楽を大衆と共に好んだ皇帝フランツ・ヨーゼフの時代ともほぼ一致する。その在位の末期、すなわちワルツ王の

Habsburg Empire

Rudolf I (1218-1291)

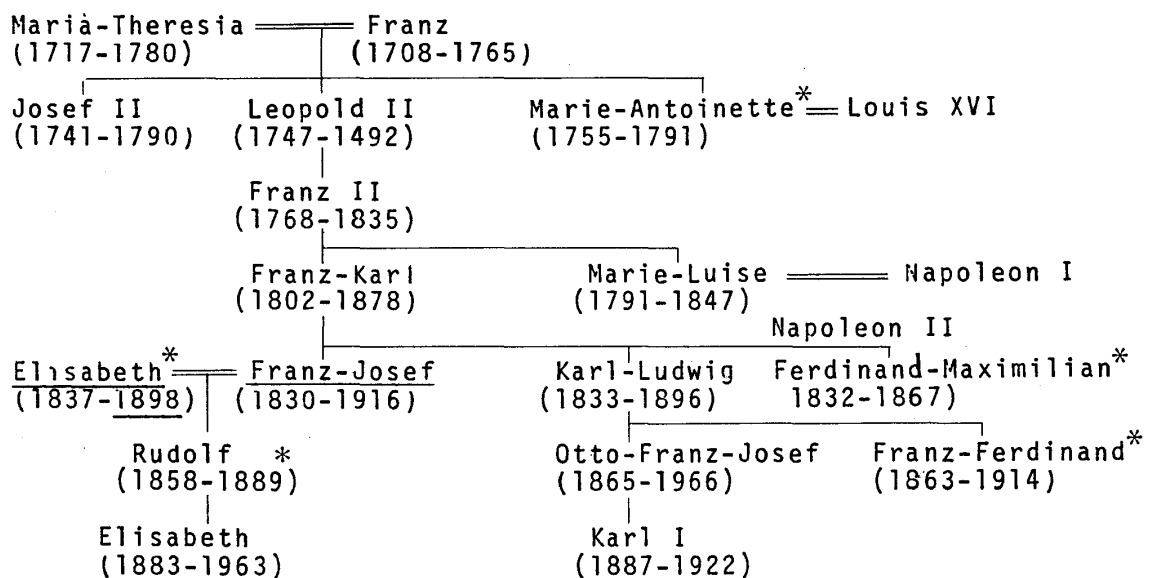


図3. Habsburg 一家の家系図。Maria-Theresia 以降。*は暗殺または心中死。

死前後、ウィーンではユダヤ人芸術家たちによる世紀末文化が開花した（増谷英樹、1993；Masuda and Hübl, 1997）。そして、長い間帝位にあった皇帝フランツ・ヨーゼフは大戦中の1916年死去し、1918年敗戦とともにハプスブルク帝国は消滅し、オーストリアは共和国となる（図3）。その在任中、重荷に喘ぐ皇帝は死ぬまでシュトラスの音楽に救われたという（Teegen、村田武雄、1952）。このフランツ・ヨーゼフ皇帝の帝国波乱の時代にシュトラウス一家の音楽は繁栄を誇ったわけである（図4）。

ワルツ王ヨハン・シュトラウス、および父ヨハン、弟ヨーゼフ、エドゥアルトらシュトラウス一家に関する伝記は意外と少ない（たとえばTeegen、村田武雄訳、1952；Gartenberg, 1974；Prawy, 1975；Kemp, 木村英二訳、1987）。ワインマン（1956）の「シュトラウス作品目録」によれば、作品番号のついたワルツやポルカだけでも479曲あり、その他番号の無いもの、あるいはオペレッタなどを合計すると500曲近い作品を世に出している。1844年10月15日、18歳の若いヨハン2世はウィーンのダンスホール“Soiree dansante”で、ついで父ヨハンの演奏するヒーティング（市の西郊外、シェーンブルン宮殿に近い）のドンマイヤーカジノ（図5）で

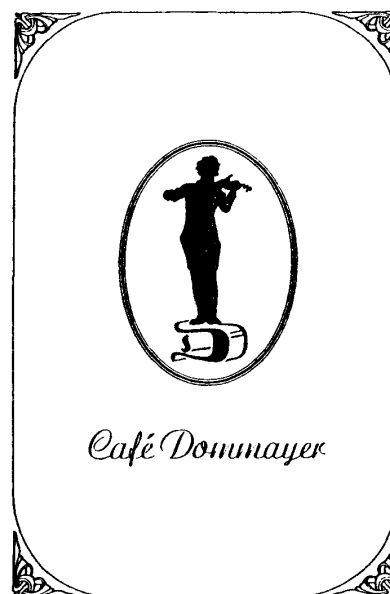


図4. シュトラウス一家 (Postkartenverlag B.K.W. 1)。 図5. ドンマイヤー・カフェのメニュー表紙

自らのオーケストラ（12-15名）を演奏して世に出た。このとき、彼はオーベル、マイヤーベール、ズッベの曲のほか、自分の作曲したワルツ“記念の詩”（エピグラム、Op. 1）、作品2の“デビューカドリーユ”、ポルカ“心からの楽しみ”、(Op. 3)、ワルツ“求婚者”（Op. 4）でウィーンの音楽界にデビューした。圧巻だったのは、彼の音楽界入りを望まず、このデビュー演奏会にも姿を現わさなかった父ヨハンの名曲“ローレライ、ラインの響”（Op. 154）を演奏したことであった。息子の晴れ舞台でその音楽だけでなく、無理解で勝手な彼の父、彼女の夫の曲を息子の演奏で聴いた母の感激は想像するに余りある。ウィーン劇場新聞（Wiener Allgemeine Theaterzeitung）、10月2日（1844）は“このように早く、ニュースが出た。新しいカペルマイスター・シュトラウス”という見出しで記事を出した。カペルマイスターとは自

分のオーケストラを持つコンサートマスターのことであるが、現在では一般にコンサートマスターを意味することが多い。この新聞の記事はこう結んだ：“今や若きシュトラウスの作った5つの新しい曲を聴くことができる。彼には期待できる。市民は彼の父に対して長年持ってきた好意を息子にも同じように持ち続けるであろう。” こうして若いヨハンに対する声援は多くの新聞雑誌に掲載された。このとき、ウィーン音楽界は次のようにいったという：“Gute Nacht, Lanner”, “Guten Abend, Strauss Vater”, “Guten Morgen, Strauss Sohn.”

1825年に生まれ、1899年に75歳で死んだヨハン・シュトラウス2世は、文字どおりワルツ王らしく、19世紀の4分の3（Dreiviertel, つまりワルツの拍子）を生きた。18歳でウィーンの音楽界にデビューし、1898年、作品479 “ライムント時代の響” を最後の作品としてその活動を終えた。彼の最後のオペレッタ “ウィーン気質” は彼の死後まとめられ、初演された。そのほぼ全作品は最近、ドイツMarco PoloラベルでCD51枚（1988-1996）として売り出された。

B. 先祖と父ヨハン

1825年10月25日、ロフラノ通り76番地で母アンナは長男ヨハンを生んだ。ヨゼフ・ラナーとともに人気絶頂の父ヨハンが21歳、母アンナは18歳であった。母の父はウィーン郊外に酒場を持つ男だったが、アンナはスペインの貴族の出ともいわれ、実は放浪ジプシーが先祖だったともいわれる。父ヨハンの曾祖父ヨハン・ミヒャエルの結婚の記載が聖シュテファン寺院の登記書に中にあることが発見されたという（1862年2月11日付け）（Kemp, 木村英二訳、1987）。これによると、曾祖父の両親はユダヤ人で、1750年ころ生まれで故郷のハンガリーを離れ、ウィーンに定住、職人としてユダヤ教からカトリックに改宗した。その子フランツ・ボルギアスに長男として1804年3月14日に生まれたのが “ワルツの父” ヨハンである。ヨハン・ボルギアスは居酒屋を営んでいたため、子ヨハンが客のために演奏する楽士が弾くヴァイオリンの響やダンスの喧騒の中で育ち、自分もヴァイオリンを弾くことを願ったという。13歳のとき、嫌々ながら製本屋の徒弟奉公に出されたが、夜になると自分の小さな屋根裏部屋ではぼろヴァイオリンで心ゆくまで練習に励んだと伝えられる。徒弟奉公の年期明けののち、ヨハンが正式にヴァイオリンを学び、ダンスオーケストラで弾くようになった。1819年にあるトリオに参加したが、そこのヴァイオリン弾きはヨゼフ・ラナーであった。ヨハンはこのヴィオラ奏者として参加し、このグループは4重奏団になった。ラナーはヨハンより3歳年長であったが、2人は親友となり、一時住まいを一緒にした。ラナーは手袋製造商の息子で、ヨハンもラナーも正式の音楽教育は受けていなかったが、2人とも天分があった上、市壁の外側のヴァイオリニストの2人はいずれ壁の中を征服しようという野望をもっていた。2人が貧乏な頃、タキシードを共用して演奏会に行ったと伝えられる。

この2人が田舎風のレントラーからウイナワルツを作り上げたと言われる。しかし、現在のそのようなワルツを作り出したのは疑いもなくラナーであったといえる。この2人のワルツやレントラーをくらべるなら、筆者の見解と好みによると、ラナーのほうが父ヨハンより数段音楽的才能があるように思える。ラナーのレントラーやワルツはメロディーが自然で美しく、天才的である。父ヨハンの曲は何となくぎこちないところがあり、美しさと優美さにも欠けるきらいがある。作品番号251までの曲のうち（Weinmann, 1956）、現在聴くことのできる父シュト

ラウスの作品の中には有名な曲がいくつかあるが、メロディーの美しさ、すぐれた構成をもつ曲はあまりない。これに対して、現在レコードやCDで聴けるラナーの30数曲の中には彼の才能のほとばしる美しい曲がかなりある。筆者の好みでそれらを列挙すると以下のようになる〔()内は作品番号〕：“ユーモアのある人” (92)、“求婚者のワルツ” (103)、“載冠式のワルツ” (133)、“マリアのワルツ” (143)、“宮廷舞踏会” (161)、“シュタイル風舞曲” (165)、“ロマンティックな人々” (167)、“夕べの星” (180)、“シェーンブルンの人々” (200)。1824年にラナーは小さな弦楽オーケストラをつくったが、彼等の音楽は大変な人気で、たとえば1832年には772回も舞踏会が市内で開かれ、1つのオーケストラでは足りなくなった。そこで、2つ目のオーケストラが結成され、ヨハンは副指揮者としてこれを率いることになった。こうして別のオーケストラを率いるようになると、やがて怒りっぽい野心家で芸術家肌の神経質な父シュトラウスはラナーの人気が入らぬ、競争意識を強めるに至った。ウィーンの大衆も「ラナー党」と「シュトラウス党」に別れ、友情は破れるに至った。この2人の像がウィーン市庁舎の前 (図6)、あるいは近くのバーデンの公園にある。

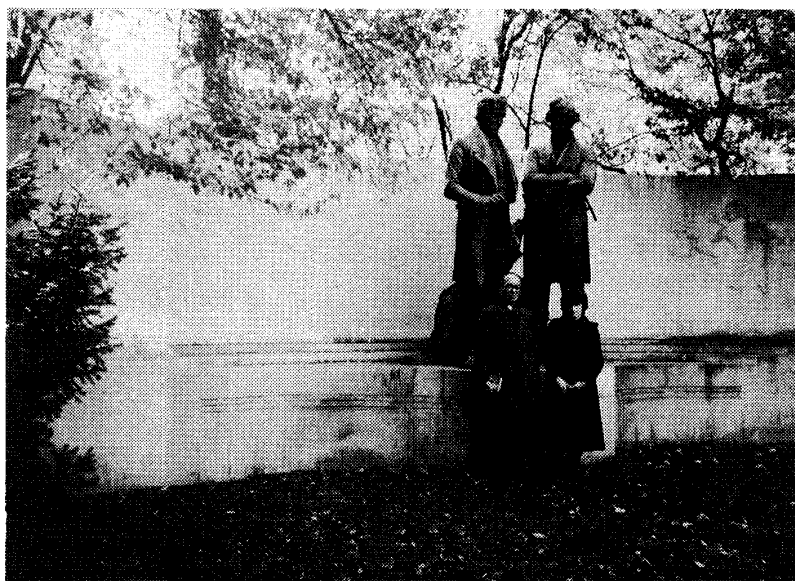


図6. 市役所前のラナー (右) とシュトラウス一世の像 (筆者写す)

こうして1825年、両雄並び立たずで、2人は別れ、別々の道を歩むことになったが、その後もしばしば一緒に仕事をした。こうして父ヨハンは独立し、自分のオーケストラを持ったが、確固たる名声のラナーのそれに太刀打ちするのは容易でなかった。しかし、1828年にはワルツ“鎖橋” (Op. 4) を作曲し、その成功によりラナー最大のライバルと称されるようになった。彼等の成功の原因には政治的、社会的なものもあった。上にも述べたような複雑な国家であった当時のオーストリアにおいて、危険な思想や社会の不満を抑えておくため、宰相メッテルニッヒの政策としてはウィーン人を怠惰にさせ、歓楽に酔わせておくことが必要で、そのためにラナーとシュトラウスの音楽とヴァイオリンが実に有効であった。

父ヨハンは1807年に開場したレオポルトシュタットのカフェー、シュペールと契約、ここを根城にして、かれの251の曲の4分の1以上がここで初演された。1830年以後はウィーンのみならず、ハンガリーやドイツにも招かれ、熱烈に歓迎された。活躍とともに家を空けることが多くなり、妻との間の5人の子供のほか、外で7人も子供を作り、ついに妻アンナから離婚を要求されるに至った。こうして音楽家という職業の難しさ、不安定さを経験している父ヨハンは子供が音楽家になることに反対し、ヨハンには銀行家になることを望んだ。たが、それでも子のヨハンは音楽家となり、1844年にデビューした子ヨハンは競いあってウィーン市民にワルツを贈りつづけた。しかし、1848年革命が起り、父は保守派、息子は革命派に別れることになった。この頃、父はイタリーを攻めた将軍を讃えて“ラデッキー行進曲”(Op.228)を作曲し、息子は革命を賛えて“革命行進曲”(Op. 54)を作曲した。ウィーンの革命騒ぎは皇帝フランツ・カールが退位して納まり、その子フランツ・ヨーゼフが18歳で皇帝となった。そして、病に侵された父ヨハンは1849年9月23日、45歳で死んだ。

C. “ワルツ王” ヨハン・シュトラウス (図7)

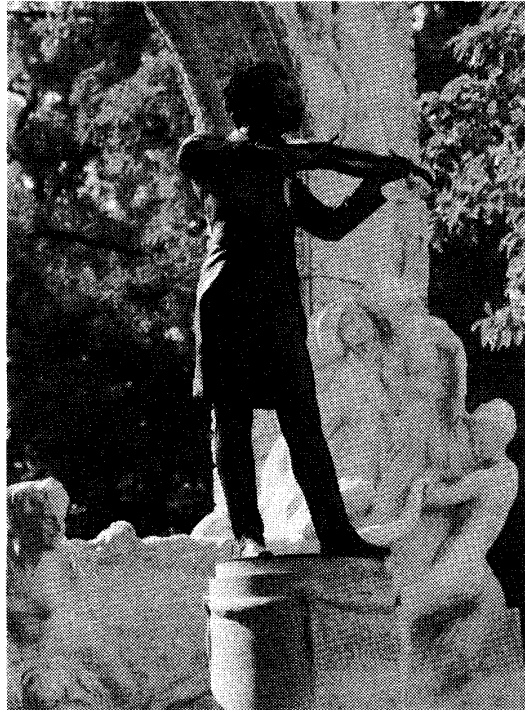


図7. 市立公園の“ワルツ王”の像 (Verlag Richard Pietsch & Co. KG., Wien)

ヨハンの生まれた2年後の1827年8月20日、弟のヨーゼフが生まれた。父は忙しくて家に帰らなかったが、ヨハンは母の手で平和に成長した。ヨハンはすでに6歳でピアノを弾いてワルツを作曲したという。そして1835年3月15日にはもう一人の弟エドゥアルトが生まれた。ヨハンは小学校ののち、11歳でギムナジウムに入学し、1840年まで善良な生徒として勉強した。内緒でヴァイオリンを手に入れ、父のオーケストラの第1ヴァイオリニストにレッスンを受けた。しかし、息子が音楽家になることに反対していた父は、このことを知って、このヴァイオリニストを直ちに解雇した。その後、ウィーン・ポリテクニクの商学部に入學して簿記などを勉

強したが、彼の音楽に対する愛着は抑えることができず、1842年これを退学して音楽に専念することにした。父はヨハンら息子たちが音楽の才能に恵まれていることを不愉快に思っており、彼等がピアノのレッスンを受けることには反対しなかったが、音楽を一生の仕事とすることには断固として反対した。1832年、ウィーンを訪問したワーグナーは父シュトラウスの音楽に魅せられたが、子シュトラウスはワーグナーに対し熱烈な尊敬の念をもった。彼の音楽に対する執拗な希望は母の影響と支持に支えられていた。まず、和声、対位法、作曲*を個人教授で学んだ。また、ヴァイオリンを宮廷歌劇場のヴァイオリニストに学んだ。

(*西洋音楽における作曲の技法としてはまず和声学と対位法に習熟しなくてはならない。和声 [harmony] は、旋律、リズムとともに音楽の3要素とされている。これは音を同時に重ねる方法である。対位法 [counterpoint] も2つ以上の独立した旋律を同時に組み合わせる作曲の技法である)

1844年、市議会の許可を得て、オーケストラの編成にかかり、上述のように、ドンマイヤーでデビューした。この日、母は息子の晴れ舞台を聴きにドンマイヤーにやって来たが、父は姿をあらわさなかった。しかし、この父子はのちに和解し、音楽上の協力さえした。父子は自分のオーケストラのみならず軍楽隊を指揮した。1843年に死んだラナーは第2市民軍軍楽隊長であったが、子ヨハンがその後任になり、父が指揮をしていた第1市民軍軍楽隊と並んで同じような制服で競い合った。

ワルツ王の音楽は1876年に書いたその不滅の名曲“美しく青きドナウ”に見られる素晴らしい技法、すなわち、魅力的な旋律を表に出してワルツの3拍子でこれを支える、という、舞踊音楽に革新をもたらせたものといえる。その創造性は、“シュトラウスの血はシャンペンで沸騰している”と言われるくらいであった。ウィーン中の女性をあこがれの的であったヨハンは突如として1862年8月、歌手でもあった10歳年長の子持ちの人妻ヘンリエッテ・トレフスと結婚して市中の女性に冷水を浴びせた。しかし、この結婚は成功で、ヨハンは転換期をへて全く新しい生活を始めた。1864年、彼は名誉ある王宮舞踏音楽長に任命され、ますますその作曲は油に乗った。法律家協会、医師会、技術家連盟など公の団体などが公開舞踏会を開くたびにヨハンはそのための作曲をした。こうして彼の人気は彼にじつくりと考える暇も与えぬほどで、いつも夜会服を来て暮す男といわれ、作曲のためのペンを手にしていなければヴァイオリンの弓をもっていなければならなかった。このため、彼の音楽に時として欠点が出たのもやむを得ないことであつたらう。

1866年、プロシヤとのわずか7週間の戦いがおこったが、この血生臭い戦争のあと、あるウィーンの男声合唱団はヨハンに何かのびのびした、心から楽しめる曲の作曲をと依頼した。この機会にヨハンは長い間その心の奥にしまっておいた“美しく青きドナウ”を創造した。この名曲は1867年2月15日、男性合唱によって初演された。しかし、ヨハンの曲の多く場合同様、この初演は成功とはいえず、これがウィーンを沸かせるのに半年を要した。1867年、パリの万国博覧会にヨハンは招かれ、音楽会を開いたが、人気をひかなかった。ところが、「フィガロ」紙の編集者がその音楽の素晴らしさを発見し、紙上でヨハンの宣伝を始めた。その結果、計画は成功し、“美しく青きドナウ”はパリの隅々まで流行し、ヨハンはパリを征服した。そし

て、彼は次にイギリスをも征服した。

これに続いて、“芸術家の生涯”、“酒、女、唄”、“楽しめ人生を”などが続々と作られた。1866年のプロシヤとの戦いに敗れ、以後オーストリアとイタリーとの関係はまだ十分に改善されていなかったが、その一層の改善にヨハンの音楽が一役買ったといわれる。彼がイタリーに演奏旅行したとき、貴族から庶民に至るまでその音楽に魅惑された。彼はこの演奏旅行を記念して“シトロンの花咲くところ”を作曲した。このような数々の名曲を生みだしている時、ウィーンにオッフエンバックが登場した。彼の音楽は甘美であるが、どちらかというところと野卑で、下品であったとも言える。そして伝統あるウィーンの舞台に卑猥なカンカン踊りを導入した。そして彼の冗談めいたすすめにより、ヨハンがオペレッタの作曲を始めたことは上述のとおりである。1972年、ヨハンは「世界平和50年祭」を祝うため、ボストンで開かれる大音楽祭に招待された。大会場で、ヨハンは大人数の歌手を指揮するという初めての経験をし、芸術的雰囲気のない状態で“美しく青きドナウ”を演奏、大ホールが吹き飛ばすほどの歓呼の中の成功を得た。この成功にもかかわらず、ヨハンは馬鹿げたアメリカの音楽の聴衆を軽蔑したという。

D. ヨハンのオペレッタ

表2に示すように、アラビアンナイトを題材にしたヨハンの第1作オペレッタ“インディゴと40人の盗賊”に続き、シュタイナー監督は“ローマの謝肉祭”という脚本をヨハンに送ってきた。彼の楽想はたちまちほとばしり、第2作が出来上がった。この脚本の物語は次のようなものである。スイスで、若い画家がアルプスの乳しぼりの女性に会う。彼女の肖像を描き、二人は恋に落ち、結婚の約束をするが、山を下りると彼は彼女のことを忘れてしまう。彼はローマで次々と新しい恋の冒険をする。彼女は彼を探しに男装して彼の弟子になり、彼をたびたび救い、巧みな計略を用いて結婚し、幸福になる。

黒い金曜日は“こうもり”作曲の要因の一つになったことはさきに述べたが、このウィーン万国博覧会の年、銀行取り付けなどであらゆるものが打ちひしがれ、万博を無事終了させるのがやっとであった。ヨハンはウィーンの苦境を救うため、新しいワルツを作曲した。これが“ウィーン気質”である。そして最高傑作“こうもり”が初演された。ヨハン41歳のときである。

続いて1875年に出来上がった次のオペレッタは“ウィーンのカリオストロ”であった。イタリーの大山師カリオストロは1684年にトルコから解放された100年祭を祝うためにウィーンにやって来る。カリオストロはここで純朴なウィーン人を思うままに騙し、錬金術をやった。彼の美しい妻も有閑マダムであった。このつまらぬ脚本にヨハンは立派な音楽を書いたが、結果は不成功であった。続いて1877年1月に初演されたオペレッタ“メトウザレムの王子”も失敗であった。しかし、その中の美しいワルツ“美しき5月”は現在もよく演奏される。そしてその後間もなく妻イエッティが1878年4月7日に死んだ。その後半月もたたぬうち、ヨハンは娘のような少女アンゲリカ・ディートリッヒ（リリー）と結婚した。

間もなく次のオペレッタ“盲目の牛”が1878年12月28日、アンデアウィーン劇場で初演されたが、脚本のつまらなさで最大の失敗作となった。しかし、次作“女王のレースのハンカチーフ”で本来のヨハンにふさわしい成功を得た。この脚本は本来スッペのためのものであったが、これがズッペのもとに届いたとき、かれは他の作曲を始めており、やむなくヨハンに見せた

表2. アンデアウィーン劇場などで初演されたシュトラウス、その他の作曲者の主な作品
(渡辺忠雄、1992から)

| シュトラウス | | その他の作曲家 | | |
|------------|----------------------------------|------------|-----------|--|
| 初演年月日 | 作品 | 初演年月日 | 作曲者 | 作品 |
| 1871.02.10 | 1. Indigo und die vierzig Räuber | 1860.11.24 | Suppe | Das Pensionat |
| 1873.03.01 | 2. Der Carneval in Rom | 1865.09.09 | Suppe | Die schöne Galathee* |
| 1874.04.05 | 3. Die Fledermaus | 1876.01.05 | Suppe | Fatinitza* |
| 1875.02.27 | 4. Cagliostro in Wien | 1879.02.01 | Suppe | Boccacio* |
| 1877.01.03 | 5. Prinz Methusalem | 1882.12.06 | Millöcker | Die Jungfrau von Vekkevukke |
| 1878.12.18 | 6. Blindekuh | | | |
| 1880.10.01 | 7. Das Spitzentuch der Königin | 1882.12.06 | Millöcker | Der Bettelstudent |
| 1881.11.25 | 8. Der lustige Krieg | 1884.01.26 | Millöcker | Gasparone |
| 1883.10.03 | 9. Eine Nacht in Venedig** | 1891.01.10 | Zeller | Vogelhändler |
| 1887.10.24 | 10. Der Zigeunerbaron | 1884.01.05 | Zeller | Der Obersteiger |
| 1887.12.17 | 11. Simplicius | 1898.01.05 | Heuberger | Der Opernball |
| 1892.01.01 | 12. Ritter Pasman | 1898.01.26 | Suppe | Die Pariserin, oder Das heimliche Bild* |
| 1893.01.10 | 13. Fürstin Ninetta | | | |
| 1894.10.12 | 14. Jabuka (Das Apfelfest) | | | |
| 1895.12.04 | 15. Waldmeister | | | |
| 1897.03.13 | 16. Die Göttin der Vernunft | | | |
| 1899.10.26 | Wiener Blut | | | |

*カール劇場、**その他

(1: インディゴと40人の盗賊、2: ローマの謝肉祭、3: こうもり、4: ウィーンのカリオストロ、
5: メトウザレムの王子、6: 盲目の牛、7: 女王のレースのハンカチーフ、8: 愉快的合戦、
9: ヴェネチアの一夜、10: ジブシー男爵、11: 田舎者、12: 騎士パスマン、13: 候爵夫人
ニネッタ、14: ヤブカ、りんご祭、15: くるまば草、16: 理性の女王+ウィーン気質)

ところ、ヨハンはこれを気に入って作曲するに至った。そして1880年10月1日にアンデアウィーン劇場で初演され、よい興行成績をあげた。その物語は以下のようなものである：ポルトガルの女王がハンカチーフに年齢のため国法によって王になれない夫にあてて「あなたは王ではないが、わたしはあなたを愛している」と書いた。この国では宰相が政治をほしいままにしており、彼女の未成年の夫は会議の席で自分の意見を述べたいと思っていた。宰相は女王のハンカチーフは夫宛のものでなく、スペインの詩人に宛てたものであると女王を誹ぼうする。そのため女王と彼女の夫との間がおかしくなり、女王の怒りを買った夫は放逐される。しかし、寂しくなった女王は彼を呼び戻し、トラブルの原因を作ったのは宰相であることがわかり、宰相を放逐して夫を王位につかせ、大団円となる。この中の“南国のバラ”は名曲で、演奏会でしばし

ばプログラムに加えられている。

ヨハンの第二の結婚は失敗であったことを自覚し、次のオペレッタ“愉快的合戦”を作曲しているとき、彼は少しも幸福でなかった。このオペレッタは1881年11月25日に初演された。これは音楽的価値はあまりないとされたが、この恋愛を扱った血を流さない、他愛のない喜歌劇は、予想外の成功をし、中の唄はウィーン中で流行した。続いてウィーンの脚本家協会が2つの脚本を出し、片方すなわち“乞食学生”をミレッカーがとり、残ったほう“ヴェネチアの一夜”＊をヨハンが取った。その結果、“乞食学生”は大成功し、1883年10月3日にベルリンで上演された“ヴェネチアの一夜”は失敗作であった。その後、その美しい音楽を救うために手入れが行われ、ウィーンで歓迎されるようになった。

ヨハンはリリーと苦勞の挙句、結局別れ、アデレと結婚したが、彼女がユダヤ人であったためいろいろな障害があったという。1885年10月24日、“こうもり”と並ぶ名作“ジプシー男爵”＊が誕生した。2重帝国の2つの不和な構成国オーストリアとハンガリーをこのオペレッタによってヨハンは融和させた。くわしいストーリーは省略するが、ジプシー、兵士、オーストリアの役人、酔っ払いのハンガリー人、放浪の少女、王子である放浪者、などが登場する多民族劇である。その初演はヨハンの60歳の誕生日前夜で、アンデアウィーン劇場は熱狂した。1887年12月には次の“田舎者”が初演されたが、これも失敗作であった。その後、ヨハンは4年の間において“騎士パスマン”を世にだした。この“騎士パスマン”も彼にとって幸運とはいえなかった。ストーリーは：ハンガリーの王が、騎士パスマンの領地に狩りに出かけ、その城に暫く滞在する。その間に王は彼の美しい妻にひかれ、騎士の留守中に彼女に言いよる。この様子を騎士の従者に見られ、王が去った後、従者は騎士に密告する。騎士は王を追って王に復讐しようとし、裁判官に訴える。裁判官の判決は騎士が女王に接吻することであったが、そのとき王が現われ、不埒な奴と抗議をするが、女王に諫められ、女王は騎士に自ら接吻する。1892年1月1日王宮歌劇場で初演されたこのオペレッタは大変な人気を得たが、9回上演されただけで、その後成功しなかった。その中のチャルダッシュ（ハンガリーの舞曲、Op.441）は、他の失敗作オペレッタの序曲などとともに、現在でもよく演奏される。

さらに2年後、“伯爵夫人ニネッタ”が、そして1894年に“ヤブカ”、そしてその年12月には“くるまば草”が作曲された。そしてヨハン最後のオペレッタでフランス革命の時のエピソードを題材にした“理性の女神”は1896年3月に初演されたが、いずれも短命に終わった。次に彼のバレエオペレッタ“シンデレラ”が世に出た。このあと、1899年5月22日聖霊降臨祭の日、“こうもり”序曲の指揮をしていたヨハンはひどい悪寒を覚え、曲が終るやいなや家に馬車を走らせた。そして6月3日午後4時15分、ほとんど苦しみもなくヨハンはこの世を去った。3日後の葬儀は全市をあげて行われ、中央墓地への道は彼の死を悼む人々で満たされたと伝えられる（図8）。

彼の死後、脚本が書かれ、ヨハンの美しいワルツとポルカをふんだんに盛り込んだオペレッタ“ウィーン気質”が完成し、1899年10月25日にカール劇場で初演されたが、成功しなかった。ドイツ出身の夫がウィーン女の妻の影響で、次第にウィーン風になり、浮気をする、というストーリーはウィーンの人々が求めていた夢がなかったからと言われる。しかし、3年後に、ア



図8. 中央墓地にある“ワルツ王”と妻アデーレの墓（筆者写す）

ンデアウィーン劇場で再演したときに素晴らしい大当たりをした。そして、このオペレッタは現在でもしばしば上演される。

以上述べたように、ヨハンらシュトラウスやラナーが美しい音楽をつくった19世紀は20世紀と並ぶ、世界動乱の時代で、ナポレオン後のオーストリアはその渦中にあっただともいえる。この時代はまた、ドイツ、オーストリアは産業革命のときでもあり、鉄道が開通し、電気が普及、いろいろな分野で科学技術が進行した。ヨハンも“加速度円舞曲”など、科学技術に関係する多くの曲を創っている（Hird-Jones, 坂本政明訳、1987）。しかし、ヨハンはそのオペレッタのため、“こうもり”と“ジプシー男爵”の2回しか脚本に恵まれなかった。

E. 弟ヨーゼフとエドゥアルト

上の弟ヨーゼフは工芸学校で建築を専攻した。卒業後一時紡績会社に入って将来を嘱望されたが、突然兄のオーケストラの指揮を命じられ、運命が変わった。この兄弟は性質が全く異なっており、兄は活発で洒落者だったが、弟は地味で、やや陰気、計画的な研究心をもっていた。兄は長調で音楽を作り、その中で生活したが、弟は短調を好む性格であった。しかし、ヨーゼフの指揮は思ったより成功で、以後ヨーゼフも音楽で身を立てるようになった。ヨーゼフのオーケストラは常に正確で、一音、一拍も違えず整然としていたという。彼の音楽も人気が出て、ウィーンはもとより、外国に演奏旅行にも出かけた。彼は頭痛と貧血に悩み、ロシアへの演奏旅行から帰って間もなくポーランドへ赴き、ワルシャワで指揮をしているときに舞台上で卒倒し、ウィーンへ運ばれ、1870年に若くして亡くなった（Mailer, 1985）。その遺言により弟エドゥアルトは1907年、ヨーゼフのオーケストラを解散し、全曲目を焼捨てた。批評家は“彼（エドゥアルト）はウィーンの歴史の一片を灰にしてしまった。比類なき音楽の宝物を彼の生まれたウィーンから盗みとってしまった”と言ったという。

ワインマンのリスト（1956）によると、ヨーゼフも結構多作で、作品番号のついた曲は全部で283曲ある。その内約160曲は最近“Marco Polo”ラベルでまとめられた。その中には次のような名曲がある〔（ ）内は作品番号〕：“オーストリアの村燕”（164）、“トランスアクツィオン”（184）、ワルツ“うわごと”（212）、“天体の音楽”（235）、“おしゃべりな可愛い口”（245）、“我が人生は愛と喜び”（263）、“鍛冶屋のポルカ”（269）。

もう一人の弟エドゥアルトは、はじめ文学を志し、ギリシャ語、ラテン語などに堪能であったが、音楽理論、ヴァイオリンそしてハープも学んだ。シュトラウスのオーケストラを1859年2月に始めて指揮した。兄ヨハンが指揮をやめてからとくに熱心にオーケストラを訓練した。エドゥアルトはヨハンと違い、努力家であったが、所詮はヨハンの影の地位に甘んじざるを得なかった。このため、自分の才能を十分に発揮できず、兄の名声を妬む傾向があった。その上、兄と金銭上の問題から面白くない関係になってしまった。

再びワインマン（1956）の目録によると、作品番号259まであり、次兄ヨーゼフに匹敵するほどの作品を残している。彼の音楽はあまり知られていないが、なかにはポルカ“テープは切られた”（Op. 45）などがある。

以上述べたシュトラウス一家の人と音楽はやはり遺伝的な要素が背景にあって、あのような素晴らしいワルツ、ポルカ、そしてオペレッタが生まれたように思われる。一面では反面教師としての役割も演じながら、子供たちの創造性を育てたのは父シュトラウスであろう（Linke, 吉川公男訳、1986）。一家の子孫としてこのシュトラウス・ファミリーについて述べた末弟エドゥアルトの曾孫が来日したときに行った興味ある講演の記録がある（Strauss, 渡辺忠雄訳、1986）。

F. 金の時代のオペレッタ作曲者たち

上に述べたズッペのほか、“ワルツ王”ヨハンと同時代に活躍し、ヨハンのライバルともなつてウィーン・オペレッタの“金の時代”を築き上げたのはミレッカー、ツェラー、そしてホイベルガーで、20世紀の“銀の時代”に橋渡しをしたのはオスカー・シュトラウスであろう（寺崎裕則、1983；渡辺忠雄、1990）。ミレッカーの“乞食学生”やツェラーの“小鳥売り”＊、ホイベルガーの“オペラ舞踏会”、オスカー・シュトラウスの“ワルツの夢”＊あるいはチーラーの“観光案内人”などはクスオーパーでしばしば上演される（渡辺忠雄、1990；Masuda and Hübl, 1997）。

F-1. ミレッカー

ヨハンと“ヴェネチアの一夜”＊か“乞食学生”＊か、を競って、後者をとったのがミレッカーであったことはすでに述べた。このオペレッタが大成功し、ミレッカーは一躍人気オペレッタ作曲家となった。1855年4月29日、金細工師の息子としてウィーンに生まれた。ウィーン音楽院でピアノ、音楽理論、フルートを学び、1855年ヨーゼフシュタット劇場オーケストラのフルート奏者となり、指揮者ズッペと働いた。そのすすめで1864年、グラーツの劇場（Thalia-Theater）の指揮者となったが、間もなくウィーンのアンデアウィーン劇場に移り、指揮者となった。1879年にはオペレッタ“デュバリー伯爵夫人”を作曲、そして1882年1月26日にアンデアウィーン劇場で初演された“乞食学生”が大成功した。このオペレッタは、18世紀はじめ、ポーランドを支配していたザクセン選帝侯に反乱してポーランドの独立を取り戻そ

うとする、クラコフを舞台にした貴族の物語である。主役の2人が学生という身分で活動するため、この名がついた。

ミレッカーは次に“ガスパローネ”＊を作曲、このオペレッタは1884年1月26日、アンデアウィーン劇場で初演された。シチリア島を舞台にした盗賊の物語である。密輸業者と結託して悪事を働く市長を懲らしめる義賊、実は総督の義拳と愛を描いている。このオペレッタも前作同様の成功を収めた。

ミレッカーはその後も幾つかのオペレッタを発表したが、大した成功をせず、1899年12月31日にバーデンで世を去った。

F-2. ツェラー

シュタイヤー近くのザンクト・ペーターに外科医の子として1842年6月19日に生まれた。声が美しく、ウィーンで少年合唱団員となった。その後法律を学んで法学博士となり、文部省に勤める傍ら作曲をした。故郷のチロルを題材にした名作“小鳥売り”＊を作曲、1891年1月10日、アンデアウィーン劇場で初演された。ライン河沿、ドイツ・ファルツ州の選帝侯の狩猟場が舞台である。選帝侯の浮気の現場を抑えようと選帝侯夫人がお忍びでやってくる。他方、郵便屋の娘を訪ねてチロルから小鳥売りがやってくる。夫人の身分を知らぬ小鳥売りは夫人に恋をするが、結局は動物園長に任命されることになり、郵便屋の娘とチロルへ帰る。

ツェラーはこのほか“坑夫長”などを作曲（1894年初演）するが、脳を病むなど、不幸な晩年を過ごして死ぬ。“坑夫長”の中の美しいワルツ“気を悪くしないで”（Sei nicht böse）は現在も歌われている。

F-3. ホイベルガー

1850年6月18日、ホイベルガーはグラーツの包帯製造業者の子として生まれ、工業大学をえて鉄道技師となる。しかし、子供のころから音楽が好きで、独学してウィーンへ1876年に赴き、合唱指揮者となった。そして1902年に高等音学院の教授、そして音楽批評家となり、文筆家として知られるようになった。しかし、彼が本当にやりたかったのは作曲で、歌や合唱曲などを作曲した。オペラも幾つか書いたが、台本に恵まれなかった。しかし、1898年、パリを舞台にしたオペレッタ“オペラ舞踏会”がアンデアウィーン劇場で初めて大成功した。19世紀末のパリで、謝肉祭のころ都会と田舎の2組の夫婦が互いの夫婦と浮気を試みるが、最後は無事に納まり、田舎の夫婦は楽しいパリの思い出を持って故郷へ帰る。この中で歌われる“一緒に別室へ行きましょう”は非常に美しい歌で、当時ウィーン中で歌われたそうであるが、現在も、単独でよく歌われている。あまりにも美しいので、以下に歌詞を記しておきたい。

| | |
|----------------------|---|
| おお、私と暫くあのあずまやへ行きましょう | Geh'n wir in's Chambre separee |
| そこで甘い恋を囁きましょう | Ach, zu dem süssen tête a tête, |
| そこにはシャンペンと夕食があります | dort beim Champagner und beim Souper |
| そしてみな告白しやすい雰囲気です | man alles sich leichter gesteht! |
| ああ、あなた来て下さい、私は告白します | Ach, kommen Sie, mein Herr, dass gestehe, |
| どうぞダンスや歌や輝く光を離れ、 | Was längst für Sie ich ja empfinde: |

私と愛の語らいをしましよ、
そしてそれから夕食を頂きましょう

So kommen Sie zum tête a tête,
und zum Souper, Ach.

F-4. シュトラウス、オスカー

“金の時代”と“銀の時代”を繋ぐオペレッタ作曲家にオスカー・シュトラウスがいる。このシュトラウスはStraus と綴り、s が一つであって、ヨハンとは関係がない。1870年3月6日、ウィーンのレオポルトシュタットで生まれたユダヤ人である。音楽の基礎教育を受けたのち、ベルリンへ行き、ブルッフに師事した。その後、各地の劇場で指揮者として実地の経験を積み、ウィーンに帰り、オペレッタに傾倒するようになった。“ワルツの夢”＊は1907年、カール劇場で初演され、大成功を収めた。

このオペレッタはウィーンから遠い架空の小国が舞台である。王女がウィーン出身の中尉と結婚するが、夫はいつもウィーンの思い出に耽って浮かぬ顔をしている。そこへ女性ばかりの楽団がウィーンから来てウィーン音楽を演奏する。夫の中尉は楽団のリーダーの魅力的な女性に一目惚れしてしまう。夫の気持ちを知った王女の妻はこのウィーン娘に習って宮殿をウィーン風に変え、夫の心を取り戻す。ウィーン娘は二人の幸せを願いながら演奏旅行を続ける。

オスカー・シュトラウスは次ぎに1908年11月、“勇敢な兵隊”を作曲し、これはアンデアウイーン劇場で初演された。オスカー・シュトラウスは1940年、ナチズムを避けてアメリカへ移住し、映画音楽の作曲をした。“勇敢な兵隊”は“チョコレートの兵隊”＊として映画になり、有名になった。戦後1948年帰国し、1954年1月11日、バート・イシュルで83歳の生涯を終えた。

以上の叙述には次の文献が参考になった。すなわち、全作品の集大成ではシュトラウス一族に関してはワインマンのほかフランメ（1977）、ラナー、シュトラウス、チーラーに関してはシェーンヘル（1982）がまとまっている。また、オペレッタに関しては、寺崎裕則（1983）、白石隆生（1989）、渡辺忠雄（1990）、シュナイダーライト（1981）のほか、ニック（1954）やレクラム文庫のヴェルツ（1969）がまとまっている。

4. “こうもり”のあらすじ（Marco Polo, DDD8,223249, 1995）

序曲

第1幕

1) 導入部

ウィーン近くの温泉町（バート・イシュル と想像される）、アイゼンシュタイン家の一室。

庭のほうからアイゼンシュタインの妻ロザリンデのかつての恋人アルフレートの歌声が聞こえる。小間使のアデーレは姉のイーダから晩餐会の招待状を受け取る。アデーレはロザリンデに伯母が病気だといって休みをとりたく願ったが、税務署の役人を侮辱したため夫が牢に入らなくてはならぬ取り込みの日だからと、すげなく断られる。情熱的な歌を歌いながらアルフレートが入ってくる。ロザリンデは夫が帰ってくるからと、夫が出かけたらまた来てよいからとその場は出て行かせる。

2) 3重唱（ロザリンデ、アイゼンシュタイン、弁護士プリント博士）

アイゼンシュタインが弁護士プリント博士と登場。禁固5日を取り消してもらおうとしたが、

吃りのプリント博士の腕が悪く、禁固 8 日に延長されることになった。このため、アイゼンシュタインはプリントを罵る。夫も妻もこの不運を嘆いて、弁護士とも 3 重唱となり、プリントは放り出される。

3) 2 重唱 (アイゼンシュタインと友人のファルケ博士)

プリントと入れ違いにファルケ博士が来宅する。数年前、ファルケはこうもりの仮装をして仮装舞踏会に二人で出かけ、帰途、酔ったファルケは道端で寝込んでしまうが、アイゼンシュタインはファルケを置き去りにして帰ってしまう。朝、ファルケが目を覚ますと、大勢の人に囲まれ、それ以来彼は“こうもり博士”とあだ名をつけられてしまう。いずれ何か仕返しをしてやろうとファルケは考えていたわけである。ロザリンデが部屋から出ていくと、アイゼンシュタインに、牢獄には明日の朝はいることにして、今夜はロシアの王子オルロフスキーの屋敷で開かれる晩餐会に行こう、と誘う。二人は浮かれて踊りながら 2 重唱を歌う。一方ロザリンデは、アルフレートに会うため、邪魔なアデーレに、前言を取り消して暇を出す。このとき、ファルケはロザリンデにもそつと晩餐会の招待状を渡す。

4) 3 重唱 (ロザリンデ、アイゼンシュタイン、アデーレ)

ファルケが辞去したあと、残った 3 人は、別れを悲しむ (振りをして)「悲しい、悲しい」と歌うが、内心の嬉しさを 3 人とも隠し切れないようである。夫が去り、小間使いも去り、ロザリンデ一人になると、さっそくアルフレートが入ってくる。

5) フィナーレ (乾杯の歌)

アルフレートはアイゼンシュタインのガウンを着てワインを飲み、ロザリンデも一緒に飲む。そこへ牢獄看守長のフランクがアイゼンシュタインを収監するためにやってくる。フランクはアルフレートをアイゼンシュタインと思いこんで連行しようとする。アルフレートは否定するが、具合の悪いロザリンデは“夫でなければこのように親密に酒を飲むことはない”と言う。3 人は酒を飲みながら乾杯の歌を歌い、アルフレートはアイゼンシュタインの身代わりとなって連行される。

第 2 幕

6) 導入部

オルロフスキー公邸における舞踏会。客たちはこの会のすばらしさを賛えて歌う。

7) クープレ*

オルロフスキー公は客に、それぞれ楽しんでくれるよう歌う。ファルケ博士はいつも退屈している公に、今夜は面白いドラマを見せしようと言う。このドラマの主人公アイゼンシュタインはフランスのルナール候爵という触れ込みでここへ来る。

(*Couplet: ロンド形式で主要主題とその反復お間にある対照部分の 2 行詩や歌)

8) アンサンブルとクープレ

アデーレも女優オルガという触れ込みでやってくる。そして姉のイーダに会うと、招待状など出さなかったイーダは驚く (実はアデーレに招待状を出したのもファルケである)。オルガ (アデーレ) を紹介されたルナール (アイゼンシュタイン) は驚き、“うちの小間使いに似ている”と言ってしまう。アデーレは“候爵さま、あなたのような方、ほんとうにおかしい”と歌う。

牢獄の看守長も（ファルケに）招待され、フランスの公爵シャグランとして現われ、紹介された2人のにせフランス人は珍妙な会話をする。

9) 2重唱（アイゼンシュタインとロザリンデ）

そこへハンガリーの伯爵夫人というふれこみで仮面をつけたロザリンデが登場。彼女は夫と、自分のドレスを着たアデーレを見て驚き、怒る。ハンガリー訛で話す彼女を妻とも知らず、アイゼンシュタインはいつもの女性誘惑の手口で、金の懐中時計を見せながら彼女を口説く。しかし、チクタクポルカを歌いながら、ロザリンデは時計をアイゼンシュタインから取り上げてしまう（図9）。

10) チャルダッシュ

来会者がロザリンデに仮面を取るよう求めるが、それは自由とオルロフスキーが言う。本当にハンガリーの伯爵夫人かどうかという皆の疑いを晴らすため、彼女はチャルダッシュを歌う。アイゼンシュタインはファルケが何故“こうもり博士”と呼ばれるかを皆に語る。

11) フィナーレ

宴がたけなわになり、一同シャンペンで盛り上がる。オルロフスキー、アイゼンシュタイン、アデーレは“シャンペンの歌”を歌い、ワルツで踊り、ファルケは“皆で兄弟姉妹”を歌う。宴たけなわで朝6時を打つのを聞き、アイゼンシュタインとフランクはそれぞれ慌てて邸を後にし、牢獄へ向かう。



図9. “こうもり” 第2幕の一場面（Christl Schwind の劇場影絵）。アイゼンシュタインから金時計を取り上げるハンガリーの貴族夫人、実はロザリンデ。

第3幕

12) 間奏曲

刑務所内で、スリヴォヴィッチで酔っ払った看守のフロッシュ（語り役）がウィーン弁でくだを巻いている。時折、アイゼンシュタインの身代わりで収監されているアルフレートが歌うので、フロッシュが“うるさい”と怒鳴る。そこへフランクが帰ってくる。

13) メロドラマ (フランクら)

フランクは“シャンペン”の歌を鼻歌で歌いながらご機嫌のとき、オルガことアデーレが姉のイーダとシュヴァリエ・シャグランことフランクを訪ねてやってくる。アデーレは自分がアイゼンシュタイン家の小間使いであることを告白し、自分には才能があるから、本当の女優になりたいので、世話してくれるようフランクに頼む。その証拠にとクープレを歌う。

14) クープレ (アデーレ)

アデーレは自分が百姓女、女王、貴族夫人、と何でも演じられることを歌って見せる。訪問者のベルが鳴ったので、フランクとフロッシュはこの女性2人を独房に隠す。来たのはアイゼンシュタインで、禁固の刑に服するために来た、と告げるが、フランクは自分で自宅にいたアイゼンシュタインを拘束したので、彼を本人であると信じない。そこへ弁護士プリントが来るので、その衣装を奪い、アイゼンシュタインはプリントになります。

表3. “こうもり” の公演

| 公演年 | 配役 { () は指揮者とオーケストラ } | | | | | | | | |
|----------------------|---|-----------|------------|------------|-----------|----------|----------|-----------|-----------|
| 1. ウィーン公演 (筆者の聴いた8例) | | | | | | | | | |
| | Eisenstein | Rosalinde | Adele | Alfred | Frank | Falke | Orlofsky | Blind | Frosch |
| 1962 | (Raimond Theter) | | | | | | | | |
| 1971 | (Staatsoper) | | | | | | | | |
| 1981 | (Volksoper) | | | | | | | | |
| 1982 | Minich | Irosch | Holliday | Dallapozza | Donch | Katzbock | Koller | Kandutsch | Conrads |
| | (Rudolf Bibl: Wiener Volksoperorchester) | | | | | | | | |
| 1985 | Serafin | Irosch | Kales | Dallapozza | Kraemmer | Granzer | Eder | Hellberg | Kolmann |
| | (Franz Bauer-Theussl: Wiener Volksoper Orchester) | | | | | | | | |
| 1989 | Dickie | Fontana | Lienbacher | Kobel | Wasserlof | Waechter | Eder | Forstner | Kraemmer |
| | (Frans Bauer-Theussl: Wiener Volksoper Orchester) | | | | | | | | |
| 1996 | Dallapozza | Ghazanian | Karwautz | Peroraro | Sramek | Holecek | Pavelka | Jirsa | Holzer |
| | (Adolf Eschwe: Wiener Volksoper Orchester) | | | | | | | | |
| 1998 | Dallapozza | Ghazanian | Karwautz | Dvorsky | Minich | Pop | Pavelka | Forstner | Wasserlof |
| | (Ascher Fisch: Wiener Volksoper Orchester) | | | | | | | | |
| 2. 大阪公演 (3例) | | | | | | | | | |
| 1982 | Kment | Irosch | Holliday | Dallapozza | Donch | Granzer | Koller | Kandutsch | Kolmann |
| | (Erich Binder: Wiener Volksoper Orchester) | | | | | | | | |
| 1993 | Minich | Fontana | Steinsky | Thomsen | Lehmann | Glashop | Geister | Forstner | Wasserlof |
| | (Rudolf Bibl: Wiener Volksoper Orchester) | | | | | | | | |
| 1999 | Hillebrand | Flechl | Wolf | Kerschbaum | Winkler | Adams | Tomcic | Catena | Kolmann |
| | (Richard Edlinger: Wiener Kammeroper Orchester) | | | | | | | | |

15) 3重唱 (ロザリンデ、アイゼンシュタイン、アルフレート)

そこへロザリンデがやってくる。アルフレートを釈放すべく弁護士に相談するが、実情を知ったアイゼンシュタインは弁護士の変装をかなぐり捨て、自分こそはアイゼンシュタインだ、とロザリンデの不貞をなじる。このとき、ロザリンデは晩餐会で奪った時計を出してアイゼンシュタインを逆襲する。

16) フィナーレ

ファルケが晩餐会出席者一同と現われ、すべては自分が復讐のために仕組んだことであると告げる。一同もことの成り行きを知り、アイゼンシュタインも納得し、すべてはシャンペンのせいであるとロザリンデと仲直りする。オルロフスキーはアデーレの女優志望に力になると申し出る。一同シャンペンの歌を歌って幕を閉じる。

以上が“こうもり”のストーリーだが、登場人物の名前は鉄石 (アイゼンシュタイン、実は反対だが)、盲目弁護士 (プリント)、ばらのほだい樹 (ロザリンデ)、貴族 (アデーレ、これも反対)、鷹、あるいは男に媚びる (ファルケ、司会者として王子に取り入る)、率直 (フランク)、蛙 (フロッシュ) など、登場人物の性格を面白く表わしている。このストーリーは他愛のないもので、多少の矛盾もある。たとえば、アイゼンシュタイン、アデーレ、ロザリンデの3人がいずれもオルロフスキー邸に行くが、そのタイミングはうまくずれている。また、同様にそれぞれが晩餐会から牢獄に行くタイミングも不自然といえぬこともない。にも拘わらず、このオペレッタが絶大な人気を得ており、ウフィーンオペレッタの代表といわれるのは音楽が素晴らしいからであろう。

5. “こうもり”の演奏

表3に示すように筆者はウィーンと大阪でフォルクスオーパーなどの公演を約10回ほど聴いた。また、表4にまとめたように、筆者はレコード、テープ、あるいはビデオ、CD、LDをかなり多数もっている。これらのそれぞれには特徴があり、いずれも楽しめる。これらの演奏について私見をのべたいが、すべてをここで取り上げることはできないので、音楽に素人である筆者の個人的好みで、印象に残るもの、あるいは代表的な演奏と思われるものを紹介したい。

A. ウィーンの劇場

A-1. 初期の劇場

ウィーンには多くの劇場が過去にも現在もあり、渡辺護 (下巻、1989) と渡辺忠雄 (1992) に詳しい。これらの文献によると、マリア・テレジア女王時代 (在位1740-1780) には、宮廷劇場として2つ (ケルトナー門劇場とブルク劇場) あり、その後3つの民衆劇場 (レオポルトシュタット劇場、ヴィーデン・フライハウス劇場、ヨーゼフシュタット劇場) が1780年代に郊外に作られた。

ケルトナー門劇場は1709年建てられたが、1761年火災で焼失し、1763年に建てかえられたが、1869年に新しい宮廷劇場が開設されたのを機会に1870年に取り壊された。ミヒヤエル広場に1741年に建てられた旧ブルク劇場は1888年環状道路に面して新ブルク劇場が演劇専門の劇場として建てられたため、取り壊された。

表4. 「こうもり」の全曲録音（筆者の所有するレコード、CD, LD, Video tape）

| 録音年 | 配役 { () 内は指揮者とオーケストラ } | | | | | | | | |
|------|--|-------------|--------------|--------------|----------|----------|-------------|-----------|-----------|
| | Eisenstein | Rosalinde | Adele | Alfred | Frank | Falke | Orlofsky | Blind | Frosch |
| | (レコード) | | | | | | | | |
| 1950 | Patzak | Gueden | Lipp | Dermota | Preger | Poell | Wagner | Jaresch | — |
| | (R&T, Clemens Krauss: Wiener Philharmoniker) | | | | | | | | |
| 1952 | Gedda | Schwarzkopf | | Streich | Krebs | Donch | Kunz | Christ | Majkut |
| | Boheim (EMI, Herbert von Karajan: Philharmonia Orchestra London) | | | | | | | | |
| 1955 | Kment | Gueden | Koth | Zkampieri | Waechter | Berry | Resnik | Klein | Kunz |
| | (London, Herbert von Karajan: Wiener Philharmoniker) | | | | | | | | |
| 1959 | Terkal | Scheeyrer | Lipp | Dermota | Berry | Waechter | Ludwig | Majkut | Kunz |
| | (Electrola, Otto Ackermann: Philharmonia Orchestra London) | | | | | | | | |
| 1964 | Schock | Lipp | Holm | Curzi | Berry | Nicolai | Steiner | Gruber | Schenk |
| | (Eurodisc, Robert Stolz: Wiener Symphoniker) | | | | | | | | |
| 1969 | Waechter | Leigh | Rothenberger | | Konya | Kunz | London | Stevens | Majkut |
| | (RCA Victor, Osca Danon: Wiener Staatsoper Orchester) | | | | | | | | |
| 1971 | Waechter | Janowitz | Holm | Kmennt | Kunz | Holecek | Windgassen | Kucher | Schenk |
| | (London, Karl Bohm: Wiener Philharmoniker) | | | | | | | | |
| 1972 | Waechter | Janowitz | Holm | Kmennt | Kunz | Holecek | Windgasse | Kucher | Schenk |
| | (EMI, Angel, Willi Boskovsky: Wiener Philharmoniker) | | | | | | | | |
| 1975 | Prey | Varady | Popp | Kollo | Kusch | Weigl | Rebnoff | Gruber | Muxeneder |
| | (MG, CD, Carlos Kleiber: Bayerisches Staatsoper Orchester) | | | | | | | | |
| 1982 | Kmennt | Irosch | Holliday | Karczkowski | Kraemmer | Granzer | Koller | Drahosche | Kolmann |
| | (PCM, Denon, Fukuoka, Erich Binder: Wiener Volksoper Orchester) | | | | | | | | |
| 1986 | Seifert | Popp | Lind | Domingo | Rydl | Brendel | Baltsa | Zednik | Lohner |
| | (EMI, Placido Domingo: Munchner Rundfunk Orchester) | | | | | | | | |
| | (LD) | | | | | | | | |
| 1986 | Waechter | Coburn | Perry | Hopferwieser | Kusch | Brendel | Fassbaender | Gruber | Muxeneder |
| | (DG, Carlos Kleiber: Bayerisches Staatsoper Orchester) | | | | | | | | |
| 1990 | Otey | Gustafson | Howarth | Bottone | Garrett | Michaels | Dobson | Sessions | Moore |
| | Kowalski (Pioneer Classics, Richard Bonyng: Royal Oplera House Orchestra Covent Garden) | | | | | | | | |
| | (Tape) | | | | | | | | |
| 1977 | Prey | Kanawa | Heichele | O'Neill | Langdon | Luxon | Soffel | Crook | Meinrad |
| | (Thorn EMI, Placido Domingo: The Orchestra of the Royal Opera House) | | | | | | | | |

レオポルトシュタット劇場は66年近い歴史を誇ったが、カール劇場の誕生と共に1847年その役目を終えた。ヴィーデン・フライハウス劇場はモーツァルトの「魔笛」初演と、興行師シカネーダー（1751—1812）の名とともに知られたが、1801年、アンデアウィーン劇場の開設とともに閉鎖された。ヨーゼフシュタット劇場は市壁の外、現第8区に1788年建てられた。1834年に開かれた開場記念の大舞踏会では父シュトラウスが指揮をしたというが、父と子の2曲は

このために作曲された（父：ヨーゼフシュタットダンス（Op. 231）、子：小さなシュトラウスのワルツ（Op.151）。カール劇場では支配人ネストロイがオッフエンバックを好み、その「天国と地獄」がウィーンで1860年初演された。

シュトラウスのオペレッタを初演したアンデアウィーン劇場は現在もナッシュ市場からミレッカー小路に入った左手に健在である（図10）。入り口上部に「魔笛」のパパゲーノ（Papageno）



図10. アンデアウィーン劇場の正面（Verlag Hans Rau, Wien）

とパパゲーナ（Papagena）の像がある。そのこけら落とし公演は、ヴィーデン・フライハウス劇場のさよなら公演の翌1801年6月13日に行われたという。経済的危機を乗り越え、ここでは1860年11月24日に最初のウィーン・オペレッタであるズッペの「寄宿学校」が初演された。その後、この劇場はオペレッタ時代を迎え、支配人がオッフエンバックと契約し、まず「美しきヘレーネ」を上演し、1865年3月17日にはオッフエンバック自ら指揮して、熱狂的な喝采を浴びたと伝えられる。1867年、シュタイナーが支配人となり、シュトラウスにオペレッタの作曲を依頼したことは前述のとおりである。こうして、まず1871年2月10日「インディゴと40人と盗賊」（これは1906年に「千一夜物語」として改作された）、1873年3月1日に「ローマの謝肉祭」、そして1874年4月5日に「こうもり」が上演された。そのあと、1875年に「ウィーンのカリオストロ」、等々が上演された（表2）。

このように、シュトラウスのオペレッタは2つ（“メトウザレムの王子”、“ヴェネチアの一夜”）を除き、すべてアンデアウィーン劇場で初演された。筆者も一度同劇場でレハールの“メリーウイドウ”を観たことがある。しかし、現在では、アンデアウィーン劇場、あるいは国立劇場でときにオペレッタを上演することもあるが（Klein, 1986）、オペレッタは圧倒的にフォルクスオーバー（国民劇場）で上演される。

A-2. フォルクスオーパー (図11)

フォルクスオーパーは1898年、皇帝フランツ・ヨーゼフの帝位50周年を記念してドイツ語による演劇を上演する目的で「皇帝記念市立劇場」として建てられた (Wiener Volksoper, 1985;

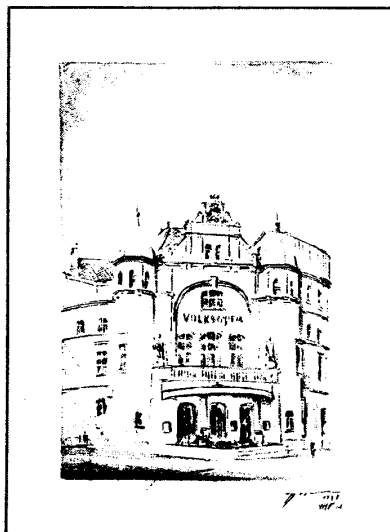


図11. フォルクスオーパー (水彩画)

Wiener Volksoper, 1989; Österreichischer Bundestheaterverband, 1994)。当時の社会的、経済的、政治的な動向により、大衆公益を目的としたキリスト教社会党が勃興したことが力になったという。初代の支配人は詩人ミュラー・グッテンブルン (在任1898-1903) だったが、負債をかかえて辞任、後任にはシモンズ (在任1903-1917) がなり、この国民劇場を音楽劇場とし、「国民歌劇場」と改名した。1904年にはウエーバーの“魔弾の射手”，プッチーニの“トスカ”、フンパーディンクの“王様の子供たち”などを上演し、ストラヴィンスキーの“兵士の物語”の初演をした。1919年に前宮廷指揮者ワインガルトナーが数々の名舞台を残した。そのご支配人はつぎつぎと変わったが、のちにハリウッドに移ったプレミンガーが劇場を演劇劇場に戻した。この頃、日本の劇団がはじめてフォルクスオーパーに招かれた。1931年にカール・クラウスが支配人となり、この劇場をはじめて古典的歌劇場に戻し、ヴェルディ、プッチーニ、ワグナーあるいはオッフェンバッハの“美しきヘレナ”などを上演した。ヒトラーにオーストリアが併合された1938年、一時休演したが、歌手だった支配人バウマンの頃、内部設備などを改装し、10月18日ベトーヴェンの“フィデリオ”で再開した。バウマンは1941年死去し、あとにはイエリが支配人になった。このとき、劇場の正式名は「ウィーン市歌劇場」となり、R. シェトラウス の“ナクソス島のアリアドネ”、“サロメ”などを上演した。しかし、戦争末期の1944年7月13日に劇場は閉鎖され、軍の兵たん部になった。しかし、幸い、この劇場は爆撃などによる破壊から免かれた。そして戦争の終るか終らぬ1945年5月1日に再開し、支配人イエルガーはヨーゼフ・クリップスを指揮者に招いてモーツァルトの“フィガロの結婚”、“魔笛”などを上演した。さらに終戦後の6月以降毎日マスカーニの“カヴァレリア・ルステフィカーナ”などのオペラ、それに“こうもり”などを上演した。支配人はザルムホーファーに変わり、この

秋には爆撃で破壊された国立劇場のメンバーによるベートーヴェンの“フィデリオ”を演じ、「フォルクスオーパー内の国立劇場」(Staatsoper in der Volksoper)と言われた。

1952年以降、“乞食学生”などのほか、アメリカのミュージカル“ポーギーとベス”まで上演して大成功となった。1957年には立見席を設けるなどの改装をし、1958年12月には創設60年を迎えた。1963年には支配人が交代、20世紀オペラなども演じ、また海外演奏旅行も始めた。1973年、歌手のデンヒが支配人となり、オペレッタブームを引き起こし、アメリカ、日本などに積極的に演奏旅行をした。1987年からやはり歌手のヴェヒターが支配人となり、多くのオペレッタのほか、モーツァルトのオペラ“コシファントウツテ”(女はみなこうしたもの)、“ドンジョヴァンニ”、“フィガロの結婚”、“魔笛”などを上演した。この頃、バレエもはじめ、“シンデレラ”、“コッペリア”を上演した。1992年から支配人はホルンダーに変わり、シュトラウスのほかレハールの“ジュディッタ”や、ベナツキーの“白馬亭にて”などのオペレッタを盛んに上演するようになり、文字どおりフォルクスオーパーはオペレッタの殿堂としてその名を誇っている。

このフォルクスオーパーで筆者が観た“こうもり”の中では(表3)、1985年の公演が印象に残り、大変良かったように記憶する。表にあるように、イーロツシュのロザリンデが声、演技ともに印象に残った。フォルクスオーパーでオペレッタを観ると、とくに1980年代は達者なビーブル、パウアー・トイスルが指揮することが多かったが、現在では新年のコンサートで日本におなじみのエシュヴェーらが指揮するようになった。

“こうもり”は他のオペレッタと異なり、レコードなどでは大物指揮者、大物オペラ歌手が演奏している(表4)。この中からとくに名演奏を選ぶのはむつかしいが、やはりクラウス指揮の1950年の録音、また、そのベートーヴェンやモーツァルトはテンポが不自然に早く、大げさで筆者は好きでないが、カラヤンの“こうもり”(1955)全曲録音はすばらしい。さらに1971年録音のベームのレコードは抜群である。筆者の好みからいうとボスコフスキーの1972年録音の“こうもり”は端麗でしかもウィーン情緒に満ちた秀逸である。これらの“こうもり”はいずれも大編成の本格的演奏で、オーケストラはウィーンフィルハーモニー管弦楽団である。この管弦楽団は世界のトップで、他の追従を許さぬ地位を占めており、多くの第一級の指揮者が指揮をしているが(Weigel, 1967; オーストリア友の会, 1974; Diemann, 1986)、この事実は“こうもり”のオペレッタにおける特異的な位置を示している。まず、これらの名演奏の指揮者についてのべよう。

B. 指揮者

B-1. クラウス

クラウスによるウィーンフィルはそのウィーン風の優雅な演奏で一世を風靡した。1893年3月31日、ウィーン生まれで、1954年5月16日、旅先のメキシコで亡くなった。大公の父をもつ名門の出で、ウィーン少年合唱団で少年時代を過ごしたのち、ウィーン音楽院でホイベルガーらに師事し、1912年ブルノ(Brün, 現チェコ)歌劇場の合唱指揮者、さらに1913-1922年の間、リガ(現ラトヴィア)、ニュルンベルク、グラーツの歌劇場で指揮者としての経験を積んだ。1922年からウィーン国立歌劇場の指揮者および音楽アカデミー教授に招かれ、さらにフランク

フルト、ベルリン、ミュンヘンなどの歌劇場の総監督を務めた。また、1939年からザルツブルクのモーツァルテウム音楽院院長もつとめた。戦後もウィーン国立歌劇場音楽監督、ウィーンフィルの常任指揮者として活躍した。自伝もあるが、その出自から「指揮台上の貴族」と呼ばれた（Diemann、芹沢訳、1986）。クラウスについて特記しなくてはならないことは、戦争中の1942年正月にニューイヤーコンサートを創始したことである。戦争で暗い気持ちのウィーン市民を元気づけるため、明るくて美しいヨハン・シュトラウスのワルツ、ポルカを演奏し、その死の年まで続けた。クラウスの死後はウフィーンフィルのカペルマイスター（コンサートマスター）だったボスコフスキーが後を継ぎ、シュトラウスばりにヴァイオリンを弾きながら指揮をして、その演奏は人気を博した（保柳健、1988）。

B-2. カラヤン

日本でのカラヤンの人気は異常に高い。スポーツマンで自家用飛行機を乗り回す移植の指揮者で、戦争中はナチスに入党し、戦後は奇蹟的に復活して音楽界における権力者として振る舞った。ナチス黨員になったことを戦後非難されたとき、“戦争中、ドイツ国内でナチスに入らずどうして音楽活動を続けることができたか”と聞いて開き直ったと伝えられる。何かにつけ人々の話題となる個性的な人物であった。その伝記もあるが（例えば、Vaughan、堀内静子訳、1987）1908年、ザルツブルクに生まれた。父の先祖はギリシャ系マケドニア人といわれるが、父は医師で、母はスラブ系であったという。モーツァルテウム音楽院で学び、若くからピアニストとして囑望された。やがてウィーンに出て国立音楽院に入学、クレメンス・クラウスらに指揮を学んだ。そして、1929年にドイツのウルムで指揮者としての第一歩を踏み出した。ついで1934年、アーヘンの音楽監督に任命され、ついでウィーンフィルの指揮を依頼された。これに先立つ1933年、ヒトラーが政権を取って間もなくカラヤンはナチスに入党した。彼は1938年をはじめベルリンフィルハーモニーを初めて指揮し、フルトヴェングラーの死後、このオーケストラの音楽監督となり、これを望みどおり自分のものにした。はじめ、頭角を表わすカラヤンに対し、フルトヴェングラーは途方もない不安を抱き嫉妬して、カラヤンが何度目かのベルリンフィル指揮をした1939年4月以降、あからさまなやり方でカラヤンをこのオーケストラから遠ざけたともいう。1954年、フルトヴェングラーの死によりカラヤンはベルリンフィルの音楽監督になり、1989年辞任するまで世界的に活躍し、「帝王カラヤン」と呼ばれた。ベルリンフィル在任中にはウィーンに戻ってウィーンフィルを指揮し、不滅の名演奏“ばらの騎士”（R. シュトラウス）を録音したり、ベルリンフィルに女性クラリネット奏者を入団させようとするなど、暴君的振る舞いでベルリンフィルといざこざを起したりしたが、和解し、本物の響を鳴り渡らせたと評価されている。20世紀を代表する指揮者の一人であろう。

B-3. ベーム

何回かの来日で日本にもファンが多かったし、その風格ある指揮は類を見ない。とくにそのモーツァルトには定評があるが、筆者はベーム指揮の“こうもり”には強い愛着を覚える。その指揮はゆったりとし、全曲を歌い上げるように楽しんで演奏している様子がビデオテープで伺い知ることができる。

1894年グラーツに生まれた。はじめ法律を学んで博士号を取ったが、音楽に転向し、ウィー

ンで作曲、音楽理論、指揮法を学んだ。1917年からグラーツ歌劇場で3年間、副指揮者を務めたが、ワルターに認められ、1920年にミュンヘン歌劇場の指揮者に迎えられた。1927年にはドイツ、ダルムシュタットの音楽総監督となり、1934年にはドレスデンに移った。この時代、彼はリヒャルト・シュトラウスに会い、その指導を受けるようになり、シュトラウスの歌劇の指揮を任されるようになった。こうしてベームはシュトラウスから後継者としての信頼を得るに至った。1933年、ワグナーの楽劇でウィーン国立歌劇場にデビューし、以後1942、55年には総監督に就任した。この間、ザルツブルク音楽祭、バイロイト音楽祭には1938年以後毎年のように出演した。1981年ザルツブルクで死去。グラーツにはベームの生家と墓がある。ベームについては興味ある自伝（ベーム、高辻知義訳、1976）や優れた伝記がある（アントラー、高辻訳、1983）。先年来日するときNHKのインタビューで、質問者と以下のようなやりとりがあったことを筆者は印象深く覚えている。“問い” ベートーヴェンやシューベルトがもしこの部屋に入って来たらどうしますか？ “答え” もちろん最敬礼します。“問い” では、モーツァルトが来たらどうしますか？ “答え” 私は卒倒するでしょう。ベームは真にモーツァルトを愛したが、シュトラウスのレコードも多い。しかし、オペレッタでは“こうもり”以外にない。

B-4. ボスコフスキー

1909年、ウィーンに生まれた。少年時代は音楽家になろうという気は全くなく、フットボールの選手になる未来を夢見ていたという。ヴァイオリンも学んでいたが、やがてウィーン音楽アカデミーにおいて音楽の勉強を始めた。1933年ウィーンフィルハーモニー管弦楽団に入団、1935年、26歳でこのアカデミーの講師（Dozent）、のちに教授となった。1939年にコンサートマスターに就任、多くの著名な指揮者のもとで演奏活動を行った。戦後の1948年、ウィーンフィルハーモニーのメンバーからなる室内楽団、すなわち四重奏団と八重奏団（Wiener Oktetts）を創設し、自ら第一ヴァイオリン奏者（Primarius）として室内楽においても活動を始めた。1954年からクラウスのあとを継いで新年コンサートの指揮を始めた。かつてのシュトラウスのように“立ち弾き”（Stehgeiger）で人気を博した。しかし、ボスコフスキーは“私はあくまでヴァイオリニストが本職で、指揮は趣味である”と言った。60歳になったとき、“この歳はヴァイオリニストとしては老年と言えるでしょうが、指揮者なら80歳で充実した年齢と言えるでしょう。したがって、私はこれから指揮することに次第に重点を置くでしょう”と述べた。彼はことにモーツァルトの曲を愛し、戦前はピアニストのリリー・クラウスとモーツァルトのソナタ全曲を録音している。ボスコフスキーはモーツァルトをウィーン風に軽快に明るく何とも言えぬ美しい音色で演奏する。しかし、彼は何にもましてワルツ王ヨハン・シュトラウスを好み、その音楽の権威であると自負している。1970年に同管弦楽団を退団したが、新年コンサートの指揮は続けた。しかし、1979年秋に健康上の理由でこれを辞退した。後任は決まらず、現在でも毎年のように異なる指揮者によってコンサートは続けられている（Schumann, 1976）。新年コンサートの指揮者を退いたあとは伝統あるヨハン・シュトラウス管弦楽団の指揮者として活躍したが、先年亡くなった。その墓はウィーンの中央墓地にある。筆者は来日した彼の演奏を何度か聴いたが、ウィーンでは何といても1972年元旦、楽友協会大ホールで聴いたニューヨークコンサートにおけるボスコフスキーの“立ち弾き”による指揮と、ウィーンフィルの独特の音色は終生忘れられない（図12）。



図12. 1972年の新年コンサート。ボスコフスキーの立ち弾き（筆者写す）。

C. フォルクスオーパーの歌手たち

以下の叙述は主として各種オペレッタ上演プログラム、あるいはレコード等の解説を参照した。指揮者ビーブルは現在フォルクスオーパーの指揮で活躍しているが、彼はフォルクスオーパーと何度も来日したオペレッタのヴェテランである。ウィーン音楽アカデミーに学び、1948年、グラーツのオペラハウスでオペラ歌手の教師として音楽の経歴を始めた。1951年、インスブルックで指揮者としてデビューし、グラーツでオペレッタの指揮者として活動を始めた。1966年からはアンデアウィーン劇場の音楽総監督、1972年からフォルクスオーパーに在籍している。

ウィーンの名歌手については幾つかの紹介もある（たとえば白石隆生、1989）。以下、いくつかの資料に基づいて主な歌手を列挙したい。

C-1. 女性歌手たち

【ヤノヴィッツ】：ソプラノ。ベルリンに生まれ、グラーツで声楽を学んだ。1959年からウィーン国立オペラと契約。1960年にはバイロイト音楽祭、1963年にはザルツブルク音楽祭でデビューした。カラヤン指揮の歌劇によく出演し、1981年にはウィーン国立歌劇場の名誉会員。フォルクスオーパーには出演しないが、レコード“こうもり”のロザリンデ、それにもまして“ばらの騎士”の元帥夫人は圧巻である。

【コラー】：ソプラノ。グラーツ近くのクラゲンフルトに生まれ、ウィーン芸術音楽アカデミーで演劇、声楽、バレエを学び、1956年フォルクスオーパーと契約。暫くドイツ、アメリカに滞在したのち、1979年にフォルクスオーパーに戻った。“メリーウイドウ”のヴァレンシアン、“こうもり”のイーダやオルロフスキーなどを得意とする。

【ホリデイ】：ソプラノ。アメリカ生まれ。テキサスのヒューストンでダンス、ミュージカル、オペラを学び、1971年インディアナ大学のオペラ劇場でオペラ歌手としてのキャリアを始めた。1973年ヨーロッパに移り、1976年、フォルクスオーパーにデビューし、“こうもり”でアデー

レを演じた。1977年、同劇場と専属契約。“メリーウイドウ”のヴァレンシアン、“美しきガラテア”のガラテアなどが当たり役で、度々来日している。踊れるオペレッタ歌手として知られる。

【イーロッシュ】：ユーゴスラヴィア出身のメゾソプラノで、リンツ、ウルム、ベルリンなどのオペラ劇場でキャリアを積んだ。1966年からソプラノに転向し、“メリーウイドウ”のハンナを得意役とした。1968年からフォルクスオーパーでハンナ、“こうもり”のロザリンデ、などを演じている。艶やかな美しい声の持ち主で、宮廷歌手の称号を持つ。

【カーレス】：ソプラノ。グラーツ生まれ。1978年ザルツブルク音楽祭で“魔笛”のパパゲーナを演じた。1979年フォルクスオーパーと契約した。“チャルダシュの女王”のスタージ、“こうもり”のアデーレなどを得意とする。

【ホルム】：はじめ歯科医を志したが、1952年、ベルリンの音楽コンテストで第1位となり、ハンブルクで本格的に音楽を勉強した。1957年以来ウィーンのアンデアウィーン劇場、フォルクスオーパーで成功、1961年にはウィーン国立歌劇場、ザルツブルク音楽祭にも出演した。“こうもり”のアデーレ、“セビリアの理髪師”のロジーナなどを得意とする。

このほか、フォルクスオーパー所属ではないが、クラウス、カラヤン時代には、ウィーン生まれの名ソプラノ、ギューデン、ケートヤリップ、ポップ、ドイツ出身のシュヴァルツコップ、ローテンベルガー、メツォソプラノのファスベンダーらがレコードの“こうもり”で活躍している。

C-2. 男性歌手たち

【デンヒ】：ドイツ、ウエストファリア生まれのテナー。ドレスデン音楽院を卒業し、ボン、ザルツブルクの歌劇場で活躍し、戦後はここで演出も始め、また、モーツァルテウム音楽院教授に迎えられた。各地の歌劇場で活躍し、1973年、フォルクスオーパーの支配人に就任し、同劇場および国立歌劇場でオペレッタのテナー歌手、演出家として活躍するかたわらフォルクスオーパーの成績向上に尽くした。“こうもり”ではフランク役を演ずる。宮廷歌手であるが、30年以上にわたるウィーンにおける功績に対し、枢密院顧問官の地位に列せられた。

【ダラポツァ】：テナー。チロルに生まれ、ウィーンで育つ。フォルクスオーパーには合唱団員として1958年に入団したが、1962年にソリストに抜擢された。ミュンヘンでも活躍したが、フォルクスオーパーの看板テナーである。“魔笛”のタミーノ、“こうもり”のアルフレートなどを得意とする。1984年にフォルクスオーパーの名誉会員、宮廷歌手の称号を持つ。

【クレンマー】：ウィーン生まれ。音楽アカデミーのオペラ科で学ぶ。1959-60年、ウィーン室内オペラでデビューののち、アカデミーを卒業し、ザールブリュッケン劇場と契約、1965-69年、フライブルク劇場と契約。その後10年間ザルツブルク音楽祭に出演し、“フィガロの結婚”、“アラベラ”などに出演した。1972年からフォルクスオーパーの専属になった。“こうもり”のフランク、“メリーウイドウ”のツェータなどが当たり役。

【ゼラフィン】：リトアニアの生まれのバリトン。はじめ医学を学んだが、在学中に音楽に転向、ニュールンベルクで学び、卒業後ウルム歌劇場と契約、1973年からフォルクスオーパー、アンデアウィーン劇場に出演。“メリーウイドウ”のダニロ、“こうもり”のアイゼンシュタインなどが得意。

【ミニヒ】：テナー。1955年からグラーツの歌劇場で歌ったのち、1960年フォルクスオーパーに移り、オペレッタに活躍、とくに“こうもり”のアイゼンシュタインを得意とし、そのほか“メリーウイドウ”のダニコ、“乞食学生”のオレンドルフなども歌う。宮廷歌手の称号を持ち、長年の功勞に対しフォルクスオーパー名誉会員、また国家功勞章を受けている。

【フォレストナー】：テナー。リンツで声楽を学び、1969年リンツ州立劇場と契約する。1976年からフォルクスオーパーの合唱団員として入団するが、やがてソリストとなる。“こうもり”のプリント博士のほか、“乞食学生”、“チャルダッシュの女王”などで活躍。

【グランツァー】：バリトン。ウィーン生まれ。市立音楽院で学び、1974年フォルクスオーパーと契約したが、グラーツ、ミュンヘンなどでも活躍、ザルツブルク音楽祭にも出演した。“こうもり”のファルケ博士、“メリーウイドウ”のクロモウなどを歌う。

【ワッサーローフ】：歌手となる前、ウィーンのヨーゼフシュタット劇場で俳優として契約していたが、カンマーオーパーでバリトン歌手として名声を博し、ウルム、リンツ、ザルツブルクで“魔笛”のパパゲーノ、などを歌って活躍。1967年以来、アンデアウィーン劇場、1973年からはフォルクスオーパーに専属、“こうもり”のファルケ博士、プリント博士、“メリーウイドウ”のニエグシュ、“乞食学生”のエンターリヒなどで活躍。

【コールマン】：バリトン、語り役。電話局の技術者だったが、ショウなどに出演したのち、アンデアウィーン劇場、ヨーゼフシュタット劇場で成功し、1973年からフォルクスオーパーに所属し、オペレッタに活躍。“こうもり”のフロッシュ、“メリーウイドウ”のニエグシュなどが適役といわれる。

男性歌手では、フォルクスオーパー所属でなく、レコードの“こうもり”では、ストックホルム生まれのテナーのゲッダ、リートを得意とするドイツの名バリトン、フィッシャー・ディースカウ、プライ、ウィーン出身のバスバリトン、ベリー、ヴェヒター、ホレチェック、ウィーンの流行歌をとくいとクンツ、クメントらが“こうもり”の録音で活躍している。

6. “こうもり”の音楽

A. 序曲

このオペレッタの序曲は、オペレッタ総譜の大部分が完成するまで手をつけられなかった。というのは、この序曲はオペレッタの主なメロディーを集めて作られたからである。したがって、この序曲の音楽を聴けばオペレッタ全体の音楽的構成がほぼ理解できるであろう。それほどこの序曲は出来が良く、それ故にこそ現在でも序曲単独でもしばしば演奏されるのであろう。以下これを解析してみよう（Marco Polo, DDD 8.223249, 1995. J. Strauss, Jr. Edition vol. 48; Complete Overtures Vol. 1, MVD Music and Video Distribution GmbH, Munich, Germany）。その部分の譜面番号を図13の【 】内の番号順に示しておく。

まず、【1】最初の導入部アレグロヴィヴァーチェ（Allegro vivace）は第3幕のロザリンデ、アルフレート、アイゼンシュタインの3重唱（No. 15）でアイゼンシュタインが歌う“そうだ、私こそ[おまえたちに騙された]その男だ”（Ja, ich bin's、渡辺護訳）、ついで【2】アルフレートが“一体この問いは何だ？”（渡辺護訳、Was sollen diese Fragen hier?）と歌う部分がある。そして、【3】アイゼンシュタインの“それなら説明してくれ”（So erklärt mir doch, ich bitt!）

『1』 No15

EE 6359

EE 6359

『2』 No15

EE 6359

EE 6360

『3』 No16

図13. “こうもり” 序曲を構成するテーマ『1』－『6』（Edition Eulenburg GmbH, Zurich "Strauss:Die Fledermaus" から）。Eis. アイゼンシュタイン, Alf. アルフレート, Fa. ファルケ, OrL. オルロフスキー, Fr. フランク, Ros. ロザリンデ, Ad. アデーレ

『4』 No.11c

Tromp. Picc. *pp*
 Clar. Clar.
 Violone *pp*
 Viola *pp*
 Bassobocke *pp*
 Oboe *pp*
 Fagott *pp*
 Sopran *pp*
 Alt *pp*
 Tenor *pp*
 Bass *pp*
 Violoncello *pp*
 Contrabaß *pp*

Waltertempo

Oberflut

Da - her - zu - schau' dich um! - Was! - Die - er - Regi - ter -
ist - dich um - die - Welt - um - die - Welt - um - die - Welt!

Be -
ter!

EX 6389
 *) siehe Revisionsbericht

『5』 No.4

Trompeten
 Tamburo *Moderato*
 Violone *ppz*
 Viola *pp*
 Bassobocke *pp*
 Oboe *pp*
 Fagott *pp*
 Sopran *pp*
 Alt *pp*
 Tenor *pp*
 Bass *pp*
 Violoncello *pp*
 Contrabaß *pp*

Moderato

Ich - bin - ach! - so - er -
stirbt! - Die - er - Regi - ter -
ist - dich um - die - Welt - um - die - Welt!

EX 6389

『6』 No.4

Trompeten
 Tamburo *Allegro moderato*
 Violone *pp*
 Viola *pp*
 Bassobocke *pp*
 Oboe *pp*
 Fagott *pp*
 Sopran *pp*
 Alt *pp*
 Tenor *pp*
 Bass *pp*
 Violoncello *pp*
 Contrabaß *pp*

Allegro moderato

O - Gott, wie hast mich
gesehen! - Ich - bin - ach! - so -
er - stirbt! - Die - er - Regi - ter -
ist - dich um - die - Welt - um - die - Welt!

EX 6389

図13. 続き

と歌うアレグレット (Alegretto) の第3幕、二長調のフィナーレ (No. 16) が序曲の主な部分となっている。この3つの部分に続いて、【4】第2幕フィナーレ (No. 11c) ト長調のワルツ (Tempo di Valse) “この踊りをー” (Diese Tänzer mögen ruh'n!) が入り、さらに【5】第1幕のロザリンデの歌う3重唱 (No. 4) “では私一人で” (So muss allein ich bleiben) が続く。これに続いて【6】同じNo. 4のロザリンデ、アデーレ、アイゼンシュタインによる“おお何と悲しいことでしょう” (O je, o je, wie rührt mich dies)、そして再び最初のNo. 15 3重唱【1】となり、ついで【4】No. 11c のワルツ、【1】のテーマから最後のフォルティッシモ (最強音) となって序曲を終る。このように、“こうもり”の序曲はオペレッタ中の名曲を巧みに取り入れて構成されたウィーン風の傑作であるといえよう。

作曲者ヨハン・シュトラウス自身の指揮で1874年4月5日、この序曲がアンデアウィーン劇場で演奏された模様を、4月7日付けの“新自由新聞” (Neue Freie Presse) は、“序曲の演奏は大拍手によって何回も中断された”と報じた。にも拘わらず、オペレッタそのものの初演は不成功であったのも奇妙である。

B. その他の名曲

序曲に取り入れられていないが、このオペレッタには一度聴いただけで印象に残る名曲がある。これは筆者の好みであるが、第1幕から列举してみよう。

第1幕 序曲に取り入れられたNo. 4 のロザリンデの歌う“私一人で”のほか、ロザリンデ、アルフレート、フランクの「乾杯の歌」:

| | |
|-------------------|------------------------------------|
| “さあ飲みたまえ、いとしい人よ、 | Trinke, liebchen trinke schnell, |
| 飲めば目も明るくなる。 | Trinken macht die Augen hell! |
| 杯をならせ、歌え、 | Kling, kling, sing, sing, sing, |
| そうさ、もはや変えることの出来ない | Nein! Glücklich ist, wer vergisst, |
| ことを忘れる者は幸福だ。 | Was doch nicht zu ändern ist. |
| 私と一緒に飲もう! | Trink mit mir, sing mit mir, |
| 一緒に歌おう!” | sing, sing, sing! |

第2幕 フランス貴族と称して晩餐会に来たアイゼンシュタインが女優と称して姉とやってきたアデーレを見て、“家の小間使いに似ている”と言ったので、これをからかってアデーレが歌うクプレ“候爵さま” (No. 8) が美しい。

| | |
|----------------------|---|
| “候爵さま、あなたのような方は | Mein Herr Marquis, ein Mann wie Sie |
| もっとよく理解力を働かさねばいけません | Sollt' besser das verstehn, |
| だから、もっとよく人びとをご覧になるよう | Darum rate ich, ja genauer sich |
| 私は忠告します。 | Die Leute anzusehn! |
| この手だって上品ですし、 | Die Hand ist doch wohl gar zu fein, ja, |
| 脚もこの通りきゃしゃですね。 | Dies Füßchen so zierlich, so klein, ja, |
| 私の言葉づかいも、 | Die Sprache, die ich führe, |
| この細やかな腰のまわりも、 | Die Taille, die Tournure, |
| 小間使いなかには | Dergleichen finden Sie |

とても見られませんわ。
 何とまあおかしな間違いを、
 あなたはなさったことでしょう。
 滑稽だ、ハッハハッハ！
 おかしな間違いよ ハッハハッハ！
 だから笑った失礼を、ハッハハッハ！
 お許し下さいまし、ハッハハッハ！ “

Bei einer Zofe nie!
 Gestehen müssen Sie für wahr,
 Sehr komisch dieser Irrtum war!
 Ja, sehr komisch, hahaha!
 Ist die Sache, hahaha,
 Drum verzeihn Sie, hahaha,
 Wenn ich lache, hahaha!

さらに第2幕にハンガリーの貴族夫人になりすましたロザリンデが歌う“チャルダッシュ”(No. 10, Csárdás) がすばらしい。

“故郷のしらべは、
 故郷のしらべは、
 あこがれをよびさまし、
 我がまなこに涙をあふれさせる。
 なつかしき歌を聴けば
 心はふるさとに戻る。
 ああ、我がハンガリーの国よ。
 麗しきふるさととは明るき陽光に充たされ、

 森はみどり濃く、野は笑う。
 ふるさとにいた頃の幸いなりし思い出よ！
 ふるさとの面影絵は我が心をみたく、

 いとしき面影よ。
 今、遠くはなれていようと、
 私の思いはいつまでもおまえに捧げよう！

 おおすばらしき故郷よ明るき陽光にみたされ

 森はみどり濃く、野は笑う。

 ふるさとにいた頃の幸いなりし思い出よ！
 ハンガリーの血を受けたこの胸は血と燃える。

 さあ、踊ろうよ。明るき、チャルダッシュの響！

 小麦色の肌の娘は私の踊り相手だ。

Die Klänge meiner Heimat!
 Klänge der Heimat
 Ihr weckt mir das Sehnen,
 Rufet die Tränen ins Auge mir!
 Wenn ich euch höre, ihr heimischen Lieder,
 Zieht mich's wieder,
 Mein Ungarland, zu dir!
 O Heimat so wunderbar, wie strahlt dort die
 Sonne so klar!
 Wie grun deine Wälder, wie lachend die Felder,
 O Land, wo so glücklich ich war!
 Ja, dein geliebtes Bild meine Seele so ganz
 erfüllt,
 Und bin ich auch von dir weit, ach weit,
 Die bleibt in Ewigkeit
 Doch mein Sinn immerdar ganz allein
 geweiht!
 Heimat so wunderbar, wie strahlt dort die
 Sonne so klar!
 Wie grün deine Wälder, wie lachend die
 Felder,
 O Land, wo so glücklich ich war!
 Feuer, Lebenslust, Schwellt echte
 Ungarbrust,
 Hei! zum Tánze schnell! Csárdás tont so
 hell!
 Braunes Mägdelein musst meine Tänz'rin
 sein;

黒い瞳の娘さん、さあ、お手を貸して！

酒に飢えた男たちは杯をひつつかみ、

次々とそれを回す！

手から手へと杯はすばやくめぐる。

火のようなトカイ酒を飲み、

祖国万歳を叫ぼう！

ハンガリーの血を受けたこの胸は火と燃える

さあ踊ろうよ明るきチャルダッシュのひびき

ラララララ”

Reich den Arm geschwind, dunkelaugig
Kind!

Durst'ge Zecher, greift zum Becher,

Lässt ihn kreisen!

Rasch von Hand zu Hand!

Schlurft das Feuer im Tokayer,

Bringt ein Hoch aus dem Vaterland! Ha!

Schwellt echte Ungarbrust, Hei! zum Tánze
schnell!

Csárdás tont so hell!

La, la, la, la, la, la!

第3幕にアデーレが、私には才能がある、と歌うクプレがまた美しい。

私に才能があるかですって？ハッハハッハ

田舎娘に扮するときは、短い衣装を身につけて、

“小リスのように愛らしく

はしゃぎ回って見せましょう。

感じの良い若者が来たら、

指の間からまばたきして

笑いかけてやりましょう。

おほこな田舎娘らしく

前かけの紐をいじくるの。

田舎の雀をこんな風にしてつかまえるの。

彼があとを追ってきたら

「駄目よ悪い人！」と言い

彼と一緒に草原に腰おろし

楽しげに歌も歌いましょう。

ラララララ！

もしもあなたがこれをご覧になたなら

私のような芝居上手が

劇場に入らないなんて

本当に惜しいことだと

おっしゃるに違いない。

女王の役に扮するときは

威風堂々と歩を運び、

華やかな衣装でやりましょう。

Ja, ob ich was hab? Talent? Hahaha.

Spiel' ich die Unschuld vom Lande,

Natürlich im kurzen Gewände,

So hupf' ich ganz neckisch umher,

Als ob ich ein Eichkatzerl war',

Und kommt ein saub'rer jünger Mann,

So blinzle ich lachenlnd ihn an,

Durch die Finger zwar nur,

Als ein Kind der Natur,

Und zupf' an meinem Schurzenband -

So fängt man Spatzen auf dem Land.

Und folgt er mir, wohin ich geh',

Sag' ich naiv: "Sie Schlimmer, Sie",

Setzt' mich su ihm ins Gras sodann

und fang' auf d' Letzt zu singen an:

Lalalalalala.....

Wenn Sie das gesehn,

Müssen Sie gestehn,

Es war der Schaden nicht gering,

Wenn mit dem Talent mit dem Talent

Ich nicht zum Theater ging'!

Spiel' ich eine Königin,

Schreit ich majestatisch hin,

Na ganz, ja, in meiner Gloria!

人々は垣を作ってうやうやしく
 私の歌を聴くでしょう。
 微笑もて国を治める、
 これが本当の女王さま！
 ラララララ！
 もしもあなたがこれをご覧になったなら、
 私のような芝居上手が
 劇場に入らないなんて
 本当に惜しいことだと
 おっしゃるに違いない。
 パリの貴婦人に扮するとき
 候爵の奥様というわけ。
 邸に若い伯爵がやって来て、
 私の操が危うくなるの。
 2幕の間は落城せぬが、
 3幕目には負けそうになる。
 その時ドアが突然開いて、
 夫が帰って来る、ああ！
 さあ、どうしよう「お許しを！」
 すると夫は許してくれる。
 こうして最後の場面では観客は皆泣いてしまう。Zum Schluss-Tableau, da weinen d'Leut;
 ああ！ “

Alles macht voll Ehrfurcht mir Spalier,
 Lauscht den Tönen meines Sang's.
 Lachelnd ich das Reich und Volk regier',
 Königin par excellence!
 Lalalalala!.....
 Wenn Sie das gesehn,
 Müssen Sie gestehn,
 Es war der Schaden nicht gering,
 Wenn mit dem Talent, mit dem Talent
 Ich nicht zum Theater ging',
 Spiel ich 'ne Dame von Paris, ja,
 Die Gattin eines Herrn Marquis, ja,
 Da kommt ein junger Graf ins Haus, ja,
 Der geht auf meine Tugend aus, ja!
 Zwei Akt' hindurch geb' ich nicht nach,
 Doch ach, im dritten werd' ich schwach;
 Da öffnet plötzlich sich die Tur,
 O weh, mein Mann, was wird aus mir, ach!
 "Verzeihung!" flot' ich, er verzeiht, ja
 Ja, ach ja!

7. むすび

ワルツ王ヨハン・シュトラウスを、ウィーンの2大作曲家ベートヴェンやシューベルトと比較して、取るに足らない大衆音楽の作曲家だというふうに考える人もいる。ティーチエン（村田武雄訳）は次のように書いている：“大衆のための音楽、楽しみのための音楽は、決して古典音楽の秤で計ってはならない。ワーグナーはシュトラウスについて、彼はヨーロッパ音楽の最高峰の一つである。われわれの古典はモーツァルトからシュトラウスまで一筋に続いている。”

また、ヨハンがブラームスと親交を結んでいたことは良く知られているが、この本の訳者村田武雄は以下のように後記に書いている：“ブラームスは、シュトラウスの音楽こそ、ウィーン人の血であり、ベートーヴェン、シューベルトの流れを直接受けた主流である、と言った。ドイツ人、ウィーン人はシュトラウスの音楽を軽音楽だとは思っていない。彼等の純粋な魂の表現だと考えた。ウィーンでは、バッハやベートーヴェンが演奏されないことはあっても、シュトラウスの音楽だけは日々演奏されないことが無いという。それは、それらが常に民衆の音楽であり、民衆とともに動く音楽だからである。“そして、この本を訳した目的として次の3点を挙げています。(1) “美しき青きドナウ”のような音楽がどうして創り出されたか、よい音

楽を生み出すには、民衆の力がどんなに強く働きかけるかを知らせたかった、(2) シュトラウスの音楽がいかに時の世相を映し、またそれを動かしていたか、音楽がときには国の政策までも導く力のあることを示したかった、そして (3) この本では、人間が生き生きと描かれていることであった。あのような自然な曲を創り出した人間が、どんな生活環境をもっていたか、どんな人生観をもっていたかが、まるで小説のように描かれている。

天才“ワルツ王”も自らの靈感のみでほとぼり出るものを音楽にして表わすことはできても、台本があってはじめて可能なオペレッタの作曲では苦勞をした。彼の16にのぼるオペレッタのうち、本当に成功したのはわずかに“こうもり”と“ジプシー男爵”の2作品のみ、という事実は、彼が台本に必ずしも恵まれなかったことを示している。その証拠に、残りのうち、少なくとも“ヴェネチアの一晩”は今も上演されるし、その他のものも序曲はしばしば演奏される。また、彼のワルツやポルカを集めて構成された“ウィーン気質”もよく上演される。オペレッタ作家のオッフェンバックやズッペの作品も現在上演されるものは少ない。

こうして見てみると、“こうもり”がいかに優れたオペレッタであって、19-20世紀の音楽において特別な地位を占めていることが明かであろう。そして、ヨハンを中心に打ち立てられたウィーン・オペレッタの“金の時代”は20世紀の“銀の時代”に引き継がれて行く。この新しい時代を代表するのはレハールであり、カールマンである。シュトラウスの他のオペレッタ、および“銀の時代”については稿を改めたい。

引用文献

- Flamme, Chr. (1977) Verzeichnis der sämtlichen, im Druck erschienenen Kompositionen von Johann Strauss (Vater), Johann Strauss (Sohn), Josef Straus und Eduard Strauss. Druck und Verlag von Breitkopf und Dartel, Leipzig.
- Gartenberg, Egon (1974) Johann Strauss. The end of an era. The Pennsylvania State University Press, University Park and London.
- Mailer, Franz (1985) Josef Strauss. Genius against his will. (English edition). Pergamon Press.
- Masuda, Y. and E. Hübl (1997) People's life and music in Vienna in early 20th century. 帝塚山短期大学紀要34: 141-165。
- Nick, Edmund (1954) Vom Wiener Walzer zur Wiener Operette. Musikverlag Hans Silorski, Hamburg.
- Österreichischer Bundestheaterverband (1994) Die Wiener Volksoper. Bildbuch Verlag.
- Prawy, Marcel (1975) Johann Strauss. Weltgeschichte in Walzertakt. Wilhelm Goldmann Verlag, Wien.
- Schneiderei, Otto (1981) Operette A-Z. Ein Streifzug durch die Welt der Operette und Musicals. Henschelverlag Kunst und Gesellschaft, Berlin.
- Schönherr, Max (1982) Lanner, Strauss, Ziehrer. Synoptisches Handbuch der Tanze Marsche. Verlag Doblinger, Wien-München.

- Schumann, Karl (1976) Johann Strauss: Wiener Blut. EMI Electrola GmbH.
- Stradal, Otto (1974) Ewige Walzer. Johann Strauss in unserer Zeit. Cura Verlag, Wien
- Weinmann, Alexander (1956) Verzeichnis sämtlicher Werke von Johann Strauss. Vater und Sohn. Musikverlag Ludwig Krenn, Wien XV.
- Wurz, Anton (1978) Reclams Operetten-Führer. Philipp Reclam Jun. Stuttgart.
- Böhm, Karl, 高辻知義訳 (1976) 回想のロンド。白水社。
- Bruyr, Jose, 窪川英水、大江真里訳 (1981) オペレッタ。文庫クセジュ。白水社。
- Decaux, Alain, 梁木靖弘訳 (1985) パリのオッフェンバック——オペレッタの王。麦秋社。
- Dieman, Kurt, 芹沢ゆりあ訳 (1986) ウィーン・フィル——魅惑のワルツ。まほろば書房。
- Endler, Franz, 高辻知義訳 (1983) カール・ベーム。新潮社。
- Hird-Jones, C. W., 坂本政明訳 (1987) サイエンスとシュトラウス・ファミリー。シュトラシアアーデ12：4-12。
- Kemp, Peter, 木村英二訳 (1987) シュトラウス・ファミリーある音楽王朝の肖像。音楽之友社。
- Klein, Rudolf, 芹沢ユリア訳 (1986) ウィーン国立オペラ劇場への招待——その100年の歩み。文化書房博文社。
- Line, Norbert, 吉川公雄訳 (1986) ヨハン・シュトラウス父子の間柄——父から得るところ大きかった子。シュトラウシアアーデ9：8-17。
- Strauss, Eduard, 渡辺忠雄訳 (1986) ウィーンのシュトラウス家の人々。前後編。シュトラウシアアーデ9：18-24；10：12-20。
- Teetgen, Ada B., 村田武雄訳 (1952) ういんな・わるつ物語。音楽文庫59。音楽之友社。
- Vaughan, Roger, 堀内静子訳 (1987) カラヤン——帝王の光と影。時事通信社。
- Weigel, Hans, 信岡資生 (1967) ウィーン・フィルハーモニー賛。白水社。
- 池内 紀 (1981) ウィーンの世紀末。白水社。
- 保柳 健 (1988) クレメンス・クラウス、その人と芸術。シュトラウシアアーデ13：10-17。
- 増谷英樹 (1993) 歴史のなかのウィーン——都市とユダヤと女たち。日本エディターズスクール出版部。
- オーストリア友の会 (編) (1974) ウィーン・フィルハーモニー。三修社。
- 大田黒元雄 (1952) オペレッタ解説。音楽文庫28。音楽之友社。
- 白石隆生 (1989) ウィンナ・オペレッタの世界。音楽之友社。
- 寺崎裕則 (1983) 魅惑のウィンナ・オペレッタ。音楽之友社。
- 寺崎裕則 (1985) ウィンナ・オペレッタへの招待。音楽之友社。
- 渡辺忠雄 (1990) ウィーン・オペレッタ探訪。オール出版。
- 渡辺忠雄 (1992) ウィーン・オペレッタ物語。日本ヨハン・シュトラウス協会会誌 20：30-39。
- 渡辺 護 (1989) ウィーン音楽文化史、上下。音楽之友社。
- 山之内克子 (1995) ウィーン——ブルジョアの時代から世紀末へ。講談社現代新書 (講談社)。

原名索引（アイウエオ順）

【劇場】

| | |
|-----------------|------------------------------------|
| アンデアウィーン劇場 | Theater an der Wien |
| ヴィーデンフライハウス劇場 | Theater in Freihaus auf der Wieden |
| ウィーン市歌劇場 | Opernhaus der Stadt Wien |
| カール劇場 | Carltheater |
| ケルントナー門劇場 | Theater nächst des Kärntnertors |
| 国立劇場（シュターツオーバー） | Staatsoper |
| 国民劇場（フォルクスオーバー） | Volksoper |
| ブルク劇場 | Theater nächst der Hofburg |
| ヨーゼフシュタット劇場 | Theater in Josephstadt |
| ライムント劇場 | Raimundtheater |
| レオポルトシュタット劇場 | Theater in der Leopoldstadt |

【人名】1. “こうもり” 登場人物

| | |
|-----------|----------------|
| アイゼンシュタイン | Eisenstein |
| アデーレ | Adele |
| アルフレート | Alfred |
| イーダ | Ida |
| オルロフスキー王子 | Prinz Orlofsky |
| ファルケ博士 | Dr. Falke |
| フランク | Frank |
| ブリント博士 | Dr. Blind |
| フロッシュ | Frosch |
| ロザリンデ | Rosalinde |

【人名】2. 作曲家、支配人、台本作家など

| | |
|------------|-------------------------|
| アレヴィ | Halevy, Ludovic |
| イエリ | Jölli, Oskar |
| イエルガー | Jerger, Alfred |
| ウエーバー | Weber, Carl Maria von |
| ヴェルディ | Verdi, Giuseppe |
| エリーザベト（皇后） | Kaiserin Elisabeth |
| オッフェンバック | Offenbach, Jacques |
| オーベール | Aubert, Daniel-Francois |
| カールマン | Kalmán, Emmerich |
| グッテンブルン | Guttenbrunn, Adam |
| クラウス、クレメンス | Krauss, Clemens |

| | |
|----------------------|--|
| クラウス、カール | Kraus, Karl |
| ケルビーニ | Cherubini, Luigi |
| コールマン | Kohlmann, Anton |
| ザイフリート | Seyfried, Ignaz von |
| ザルムホーファー | Salmhofer, Franz |
| シカネーダー | Schikaneder, Emanuel |
| シモンズ | Simons, Rainer |
| シュタイナー | Steiner, Max |
| シュトラウス、アデーレ | Straus, Adele |
| シュトラウス、オスカー | Straus, Oscar |
| シュトラウス、ヨハン (父、子) | Strauss, Johann (Vater und Sohn) |
| ク 、ヨハンミヒヤエル (曾祖父) | ク , Johann-Michael |
| ク 、フランツボルギアス (祖父) | ク , Franz-Borgias |
| ク 、ヨーゼフ (弟) | ク , Josef |
| ク 、エドゥアルト (弟) | ク , Eduard |
| シュトラウス、リヒャルト | Strauss, Richard |
| シュニッツラー | Schnitzler, Arthur |
| ジュネ | Genée, Richard |
| シューベルト | Schubert, Franz |
| ズッペ | Suppé, Franz von |
| ストラヴィンスキー | Stravinsky, Igor |
| スミミツキー、オルガ | Smimitzky, Olga |
| チーラー | Ziehrer, Carl |
| ツェラー | Zeller, Car; |
| ディットリッヒ、アンゲリカ (リリ) | Dittrich, Angelika (Lili) |
| ドニゼッティ | Donizetti, Gaetano |
| ドレヒスラー | Drechsler, Joseph |
| トレフス、イエティ (ヘンリエッテ) | Treffz, Jetty (Henriette Chalhupetzky) |
| ナポレオン | Napoleon, Bonaparte |
| ネストロイ | Nestroy, Johann |
| バウマン | Baumann, Anton |
| ハフナー | Haffner, Karl |
| ビアンキ、ビアンカ | Bianchi, Bianca |
| ヒトラー | Hitler, Adolf |
| フェルディナント (皇太子) | Prinz Ferdinand |
| ブラームス | Brahms, Johannes |
| フランツ一世 (皇帝) | Kaiser Franz I |

| | |
|---------------|--------------------------|
| フランツ／ヨーゼフ（皇帝） | Kaiser Franz-Josef I |
| フランツ・カール（皇帝） | Kaiser Franz-Karl |
| ブルックナー | Bruckner, Anton |
| ブルッフ | Bruch, Max |
| プレミンガー | Preminger, Otto Ludwig |
| フンパーディンク | Humperdinck, Engelbert |
| ベートーヴェン | Beethoven, Ludwig van |
| ベナツキー | Benatzky, Ralph |
| ベネディクス | Benedix, Roderich |
| ホイベルガー | Heuberger, Richard |
| ホフマン | Hoffmann, Johann |
| ホルツァー | Holzer, Rudolf |
| ホルンダー | Holender, Iaan |
| プッチーニ | Puccini, Giacomo |
| マイヤーベール | Meyerbeer, Giacomo |
| マスカーニ | Mascagni, Pietro |
| マーラー | Mahler, Gustav |
| マリア／テレジア（女帝） | Maria-Theresia |
| ミレッカー | Millöcker, Karl |
| メイヤック | Meilhac, Henri |
| メッテルニツヒ（宰相） | Metternich, Klemens |
| モーツァルト | Mozart, Wolfgang Amadeus |
| ライムント | Raimund, Ferdinand |
| ラチェク | Racek, Fritz |
| ラナー | Lanner, Josef |
| ルエガー（市長） | Lueger, Karl |
| ルードルフ（皇太子） | Prinz Rudolf |
| レヴィ | Lewy, Gustav |
| レハール | Lehár, Franz |
| ワーグナー | Richard Wagner |
| ワインガルトナー | Weingartner, Felix von |

【人名】3. 指揮者、歌手、演奏者

| | |
|-------|--------------------|
| アモン | Amon, Franz |
| イーロシユ | Irosch, Mirjana |
| ヴェヒター | Waechter, Eberhard |
| エシユヴェ | Eschwe, Adolf |

| | |
|---------------|---------------------------|
| ガザリアン | Ghazarian, Sona |
| カラヤン | Karajan, Herbert von |
| カルヴァウツ | Karwautz, Brigitta |
| カーレス | Kales, Elisabeth |
| ギューデン | Gueden, Hilde |
| クメント | Kmentt, Waldemar |
| クラウス・クレメンス | Krauss, Clemens |
| クラウス・リリー | Krauss, Lili |
| グランツァー | Granzer, Robert |
| クリップス | Kripps, Josef |
| クレンマー | Kraemmer, Hans |
| クンツ | Kunz, Erich |
| ゲッダ | Gedda, Nicolai |
| ケート | Köth, Erika |
| コラー | Koller, Dagmar |
| コールマン | Kolmann, Ossy |
| シュヴァルツコップ | Schwarzkopf, Elisabeth |
| ゼラフィン | Serafin, Harald |
| ダラポツツァ | Dallapozza, Adolf |
| デンヒ | Dönch, Karl |
| ドヴォルスキー | Dvorsky, Miro |
| バウアー・トイスル | Bauer-Theussl, Franz |
| パヴェルカ | Pavelka, Linda |
| ビーブル | Bibl, Rudolf |
| ファッスベンダー | Fassbaender, Brigitte |
| フィッシャー・ディースカウ | Fischer-Dieskau, Dietrich |
| フォルストナー | Forstner, Josef |
| プライ | Prey, Hermann |
| フルトヴェングラー | Furtwängler, Wilhelm |
| ベーム | Böhm, Karl |
| ベリー | Berry, Walter |
| ホイベルガー | Heuberger, Richard |
| ボスコフスキー | Boskovsky, Willi |
| ポップ | Pop, Marian |
| ポップ | Popp, Lucia |
| ホリデイ | Holliday, Melanie |
| ホルム | Holm, Renate |

| | |
|----------|-------------------------|
| ホレチェク | Holecek, Heinz |
| ミニヒ | Minich, Peter |
| ヤノヴィッツ | Janowitz, Gundula |
| リップ | Lipp, Wilma |
| ローテンベルガー | Rothenberger, Anneliese |
| ワッサーローフ | Wasserlof, Rudolf |
| ワルター | Walter, Bruno |

【曲名】

(J-1: ヨハン・シュトラウス1世、J-2: 同2世、JF: ヨーゼフ・シュトラウス、
ED: エドゥアルト・シュトラウス。数字は作品番号、Op.) , W: ワルツ、P: ポルカ、
PM: ポルカマズルカ、OPR: オペレッタ。

| | |
|--------------------------------|---|
| 愛の歌 | Liebeslieder (W, J-2, 114) |
| 青髭 | Barbe-bleue (OPR, Jacques Offenbach) |
| 朝の新聞 | Morgenblätter (W, J-2, 279) |
| アラベラ | Arabella (Opera, Richard Strauss) |
| 一緒に別室へ行きましょう (坑夫長) (オペラ舞踏会) | Im chambre separee (OPR, Richard Heuberger) |
| 田舎者 | Simplicius (OPR, J-2) |
| インディゴと40人の盗賊 | Indigo und vierzig Räuber (OPR, J-2) |
| 美しき5月 | O schöner Mai (W, J-2, 375) |
| 美しく青きドナウ | An der schönen blauen Donau (W, J-2, 314) |
| ウィーン気質 | Wiener Blut (W, J-2, 354; OPR) |
| ウィーンのカリオストロ | Cagliostro in Wien (OPR, J-2) |
| ウィーンの森の物語 | G'schichten aus dem Wienerwald (W, J-2, 325) |
| ヴェネチアの一夜 | Eine Nacht in Venedig (OPR, J-2) |
| ヴェール・ヴェール | Vert-Vert (OPR, Jacques Offenbach) |
| 美しきヘレナ | La Bello Helene (OPR, Jacques Offenbach) |
| 美しきガラテア | Die schöne Galathee (OPR, Franz von Suppé) |
| うわき心 | Leichtes Blut, Polka (P, J-2, 319) |
| うわごと | Delirien (W, JF, 212) |
| 王様の子供たち | Königskinder (OPR, E. Humperdinck) |
| おしゃべりな可愛い口 | Plappermäulchen (P, JF, 245) |
| オーストリアの村燕 | Dorfschwalben aus Österreich (W, JF,) |
| オペラ舞踏会 | Opernball (OPR, Richard Heuberger) |
| 女はみなこうしたもの | Cosi fan Tutte (Opera, W.A. Mozart) |
| カヴァレリアルステカーナ | Cavalleria rusticana (Opera, Pietro Mascagni) |

| | |
|-----------------|--|
| 革命行進曲 | Revolution-Marsch (J-2, 54) |
| 加速度円舞曲 | Accelerationen (W, J-2, 234) |
| 鍛冶屋のポルカ | Feuerfest (P, JF, 269) |
| ガスパローネ | Gasparone (OPR, Franz von Suppé) |
| 観光案内人 | Der Fremdenführer (OPR, Carl Ziehrer) |
| 気を悪くしないで (坑夫長) | Sei nicht böse (OPR, Der Obersteiger: Carl Zeller) |
| 騎士パスマン | Ritter Pasman (OPR, J-2) |
| ク 、 チャルダッシュ | ク 、 Csardás (J-2, 441) |
| 寄宿学校 | Das Pensionat (OPR, Franz von Suppé) |
| 記念の詩 | Sinngedicht (Epigramm) (W, J-2, 1) |
| 求婚者 | Günstwerber (W, J-2, 4) |
| 求婚者のワルツ | Die Werber (W, Josef Lanner, 103) |
| 宮廷舞踏会 | Hofballtanz (W, Josef Lanner, 161) |
| 鎖橋 | Kettenbrücke (W, J-1, 4) |
| クラッペン森の森にて | Im Krapfenwaldl (PM, J-2, 336) |
| くるまば草 | Waldmeister (OPR, J-2) |
| 軽騎兵 | Die leichte Kavallerie (OPR, Franz von Suppé) |
| 芸術家の生涯 | Künstlerleben (W, J-2, 316) |
| 閨房 | L'Alcove (OPR, Jacques Offenbach) |
| 皇帝円舞曲 | Kaiser-Walzer (J-2, 437) |
| 坑夫長 | Der Obersteiger (OPR, Karl Zeller) |
| 心からの楽しみ | Herzenlust (P, J-2, 3) |
| 乞食学生 | Der Bettelstudent (OPR, Karl Millöcker) |
| コッペリア | Coppelia (Ballet, Leo Delibes) |
| 小鳥売り | Vogelhändler (OPR, Carl Zeller) |
| 酒、女、唄 | Wein, Weib und Gesang (W, J-2, 333) |
| サロメ | Salome (Opera, Richard Strauss) |
| ジェロルシュタイン大公妃 | La Grande Duchesse de Gerolstein (OPR, Jacques Offenbach) |
| シェーンブルンの人々 | Schönbrunner (W, Josef Lanner, 200) |
| 地獄のオルフェ (天国と地獄) | Orphe aux Enfers (OPR, Jacques Offenbach) |
| シトロンの花咲くところ | Wo die Citronen blüh'n! (W, J-2, 364) |
| ジプシー男爵 | Der Zigeunerbaron (OPR, J-2) |
| 自由の歌 | Freiheits-Lieder (W, J-2, 52) |
| シュタイル風舞曲 | Steyrische Tänze (W, Josef Lanner, 165) |
| ジュディッタ | Giuditta (OPR, Franz Lehár) |
| 常動曲—音楽的冗談 | Perpetuum mobile, Musikalischer Scherz (J-2, 257) |

| | |
|---------------|---|
| 女王のレースのハンカチーフ | Das Spitzentuch der Königin (OPR, J-2) |
| 新ウィーン | Neu-Wien (W, J-2, 342) |
| シンデレラ | Aschenbrödel (Ballet, J-2, 176) |
| 新ピッチカートポルカ | Neue Pizzicato Polka (P, J-2, 449) |
| セビリアの理髪師 | Barbieri di Seviglia (Opera, Gioachino Rossini) |
| 千一夜物語 | Tausend-und-eine Nacht (OPR, J-2) |
| 大ウィーン | Gross-Wien (W, J-2, 440) |
| 戴冠式のワルツ | Kronungswalzer (W, Josef Lanner, 133) |
| 楽しき戦争 | Der lustige Krieg (OPR, J-2) |
| 楽しめ人生を | Freut' euch des Lebens (W, J-2, 340) |
| 小さなシュトラウスのワルツ | Strausschen-Walzer (W, J-2, 15) |
| チャルダッシュの女王 | Csárdasfürstin (OPR, Emmerich Kalman) |
| デビューカドリーユ | Debut-Quadrille (Quadrille, J-2, 2) |
| テープは切られた | Bahn frei (P, ED, 45) |
| デュバリー伯爵夫人 | Madam Dubarry (OPR, Karl Millocker) |
| 天体の音楽 | Sphärenklänge (W, JF, 235) |
| トスカ | Tosca (Opera, Giacomo Puccini) |
| トランスアクチオン | Transaktion (W, JF, 184) |
| ドン／ジョヴァンニ | Don Giovanni (Opera, W.A. Mozart) |
| ナクソス島のアリアドネ | Ariadone auf Naxos (Opera, Richard Strauss) |
| 南国のバラ | Rosen aus dem Süden (W, J-2, 388) |
| ニネット伯爵夫人 | Fürstin Ninetta (OPR, J-2) |
| 白馬亭にて | Im weissen Rössl (OPR, Ralph Benatzky) |
| パスカルとシャンボール | Pascal et Chambord (OPR, Jacques Offenbach) |
| バラの騎士 | Der Rosenkavalier (Opera, Richard Strauss) |
| 春の声 | Frühlingsstimmen (W, J-2, 410) |
| ピッチカートポルカ | Pizzicato-Polka (P, J-2 + JF) |
| ファティニッツァ | Fatinitza (OPR, Franz von Suppé) |
| フィガロの結婚 | Hochzeit des Figaros (Opera, W. A. Mozart) |
| フィデリオ | Fidelio (Opera, Ludwig van Beethoven) |
| フランツ／ヨーゼフ1世万歳 | Kaiser Franz-Josef I, Rettungs-Jubel (Marsch, J-2, 126) |
| ブリュン国防軍行進曲 | Brünner Nationalgarde-Marsch (Marsch, J-2, 58) |
| 兵士の物語 | Geschichte von Soldaten (Opera, Igor Stravinsky) |
| ボッカチオ | Boccacio (OPR, Suppe) |
| ホフマン物語 | Les Contes d'Hoffmann (Opera, Jacques Offenbach) |
| 魔弾の射手 | Freischutz (Opera, Carl Maria von Weber) |
| 魔笛 | Zauberflöte (Opera, W.A. Mozart) |

| | |
|------------------|---|
| 真夏の夜の夢 | Le Reve d'une nuit d'ete (OPR, Jacques Offenbach) |
| マリアのワルツ | Maria Walzer (W, Josef Lanner, 143) |
| メトウザレムの王子 | Prinz Methusalem (OPR, J-2) |
| 盲目の牛 | Blinde Kuh (OPR, J-2) |
| もろ人よ、手を取りて | Seid umschlungen, Millionen (W, J-2, 443) |
| ヤブカ、りんご祭 | Jabuka, Das Apfelfest (OPR, J-2) |
| 愉快的合戦 | Der lustige Krieg (OPR, J-2) |
| 勇敢な兵隊 (チョコレート兵隊) | Der tapfere Soldat (OPR, Oskár Straus) |
| 夕べの星 | Abendsterne (W, Josef Lanner, 188) |
| ユーモアのある人 | Die Humoristiker (W, Josef Lanner, 92) |
| 陽気な未亡人 (メリーウイドウ) | Die lustige Witwe (OPR, Franz Lehár) |
| ヨーゼフシュタットダンス | Josephstadter-Tänze (W, J-1, 23) |
| 雷鳴と電光 | Unter Donner und Blitz (P, J-2, 324) |
| ライムント時代の響 | Klänge aus der Raimundzeit (W, J-2, 479) |
| ラインの妖精 | Rheinixe (OPR, Jacques Offenbach) |
| ラデツキー行進曲 | Radetzky-Marsch (Marsch, J-1, 228) |
| 理性の女神 | Die Göttin der Vernunft (OPR, J-2) |
| ローマの謝肉祭 | Carnivel in Rom (OPR, J-2) |
| ロマンティックな人々 | Die Romantiker (W, Josef Lanner, 167) |
| ローレライ、ラインの響 | Loreley-Rhein-Klänge (W, J-1, 154) |
| 我が人生は愛と喜び | Mein Lebenslauf ist Lieb' und Lust (W, JF, 263) |
| ワルツの夢 | Ein Walzertraum (OPR, Oskar Straus) |

【地名】

| | |
|------------------|--|
| アーヘン | Aachen |
| アルテンベルク (ハンガリー) | Altenberg |
| インスブルック | Innsbruck |
| ウィーン | Wien |
| ウェストファリア | Westfalen |
| ウルム | Ulm |
| オルムッツ | Olmütz |
| オーストリア・ハンガリー二重帝国 | Österreichische-Ungarische Doppelmonarchie |
| 環状道路 | Ringstrasse |
| クラコフ (ポーランド) | Krakow |
| グラーツ | Graz |
| クラーゲンフルト | Klagenfurt |
| ケーニヒスベルク (東プロシヤ) | Köningsberg |

| | |
|-----------------|----------------------|
| ケルン | Köln |
| 国民公園 | Volksgarten |
| ザクセン・コブルク・ゴータ公国 | Sachsen-Coburg-Gotha |
| サラエヴォ | Sarajevo |
| ザルツブルク | Salzburg |
| ザールブルッケン | Saarbrücken |
| ザンクト・ペーター | St. Peter in der Au |
| シェーンブルン宮殿 | Schönbrunn |
| シチリア | Sicilia |
| 市庁舎 | Rathaus |
| シュテファン教会 | Stephansdom |
| シュペール | Sperl |
| シュタイヤー | Steyer |
| ダルマチアのスピリット | Split in Dalmatia |
| ダルムシュタット | Darmstadt |
| 中央墓地 | Zentralfriedhof |
| チロル | Tyrol |
| ドレスデン | Dresden |
| ドンマイヤーカジノ | Dom Mayer Casino |
| ナッシュ市場 | Naschmarkt |
| ニュールンベルク | Nürnberg |
| バイロイト | Bayreuth |
| パヴロフスク (ロシア) | Pawlovsk |
| バーデン | Baden |
| バート・イシュル | Bad Ischl |
| パドヴァ | Padva |
| ハンブルク | Hamburg |
| ヒーツィンク (ウィーン) | Hietzing |
| ファルツ | Pfalz |
| ブカレスト | Bucharest |
| フライブルク | Freiburg i Br. |
| プラター公園 | Prater |
| プラター通り | Praterstrasse |
| プラハ | Prag (Praha) |
| フランクフルト | Frankfurt am Main |
| ブルノ (ブリュン) | Brno (Brün) |
| プロシャ | Preussen |

| | |
|----------------------|---|
| ペシュト (ハンガリー) | Pest |
| ベルリン | Berlin |
| ボストン | Boston |
| ポッテンシュタイン | Pottenstein |
| マイヤーリンク | Mayerling |
| マケドニア | Makedonia |
| ミカエル広場 | Michaelplatz |
| ミュンヘン | München |
| モラヴィア | Moravia |
| ライプチヒ | Leipzig |
| ライン／ファルツ | Rhein Pfalz |
| リガ (ラトヴィア国) | Riga (Latvia) |
| リンツ | Linz |
| レオポルトシュタット | Leopoldstadt |
| ワラキア | Walachia |
| ワルシャワ | Warsaw |
| 【雑】 | |
| ウィーンフィルハーモニー管弦楽団 | Wiener Philharmoniker |
| オペラ・ブッフア | Opera bouffe |
| オペラ・コミック | Opera comique |
| オペレッタ | Operetten |
| カペルマイスター (コンサートマスター) | Kapellmeister |
| ジングシュピール | Singspiel |
| 神聖ローマ帝国 | Heiliges Römisches Reich Deutscher Nation |
| スリヴォヴィッツ (酒) | Slibowitz |
| ニューイヤーコンサート | Neujahrskonzert |
| ハプスブルク | Habsburg |
| レントラー | Ländler |
| ワルツ | Walzer |